

## 講演録

## 筑後川まるごとリバーパークシンポジウム

駄田井 正

久留米大学産業経済研究所では、1987年に「筑後川流域圏経済・社会の総合的研究」のプロジェクトを掲げてから、毎年数回公開の研究発表会やシンポジウムを開催してきた。公開の研究会やシンポジウムを開催することで、当研究プロジェクトの成果を一般に知っていただくとともに、参加いただいた流域をはじめとする様々な地域の方々との意見交換ができ、それが研究に反映できるというメリットだけでなく、産官学の分野にわたる人的ネットワークが形成できたことが大きな成果である。このようなネットワークをもとに、研究成果をただ研究の段階にとどめるだけでなく、実践と結び付けようということで1999年にNPO法人筑後川流域連携倶楽部が形成された。筑後川流域連携倶楽部は、したがって、流域圏で環境保全・文化振興・地域づくりに取り組むグループや個人のネットワークであり、流域圏を遊びと学びと仕事が一体化して充実し、生活の豊かさを実感できる地域にすることを目的としている。学びの場を実現する一つのプロジェクトとしては、「筑後川まるごと博物館」が既に実施されている。今回の「筑後川まるごとリバーパーク」は遊びの場としての流域圏の再発見と活用を目的としている。本シンポジウムは、この構想を実現する一歩として計画されたものである。

## ＜開催宣言＞ 財 津 忠 幸

(NPO 法人 筑後川流域連携倶楽部副理事長)

こんにちは。大変お忙しい中をお集まりいただきまして、ありがとうございます。  
ます。

私は、筑後川流域連携倶楽部副理事長の財津忠幸でございます。昨年、第16回  
筑後川フェスティバル（佐賀大会）で「ゆたかきよらか清流宣言」を行いました  
が、その事務局のほうも担当いたしております。

本日は、久留米大学産業経済研究所の主催によりまして、筑後川まるごとリバー  
パークのシンポジウムを開催することになりました。ご存知のように、この筑後  
川は4県50数市町村にまたがる川であります。それぞれの自治体は統一性のな  
いあまり変わりばえのしない色んな政策をとっています。その陰に、今まで筑後  
川で育てられた文化や経済、そして色んな特色ある歴史というものが、だんだん  
埋没しようとしています。そういったものを含めまして、本日は、このまるごと  
リバーパークのシンポジウム・対談の中からどういう風にしたら新たな筑後川を  
残せるかという問題について、上流から下流までそれぞれにご活躍されておしま  
すパネラーの皆さん方の話もお聞きしながら、新たな可能性というものを作って  
いきたいと思ひます。

どうぞ最後までよろしくお願ひいたします。ではただいまより、筑後川リバー  
パークシンポジウムを開催いたします。

## &lt;基調対談&gt; ～筑後川まるごとリバーパーク構想とは何か～

中 村 健 一  
駄田井 正

## 【駄田井】

皆さんこんにちは。今日はお忙しい中、足を運んでくださりありがとうございます。今から中村所長さんと2人で、「筑後川まるごとリバーパーク」がどういうものなのかということをお話させていただきたいと思います。

この「筑後川まるごとリバーパーク」ですが、まだ構想の初期段階でございます。皆さんから色々なご意見を聞きながら、魅力あるものにしていきたいと思っています。

## 【中村】

皆さんこんにちは。筑後川工事事務所長をしております、中村といいます。

駄田井先生は大変有名な先生でございますので、皆さんご承知と思いますが、私は関わって日も浅そうございますので、ちょっと自己紹介させていただきます。私は1957年、生まれは東京です。今年45歳になっております。私と川のかかわりを言いますと、小学校5年生まで東京におりまして、都会育ちだったんで殆んど川というのは知らずに育ってきましたが、小学校6年生の時に、岩手県の方に父親の転勤で越しまして、それからは毎日魚捕り、イワナが捕れるような所ですが、そんな少年時代を送ってきました。その後、東京に移りましたが、そういった岩手での生活が私の今の原点になっているかなと思います。職業的にも、川の事を選んだということはかかわりがあるかと思います。昨年7月に岐阜から久留米にまいりました。半年ぐらい経ったところでございまして、これから流域の皆さんとお付き合いさせていただき、また、色々勉強していきたいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

### 【駄田井】

「筑後川まるごとリバーパーク」の基本的な構想を資料の方に掲げております。なぜ、こういう「筑後川まるごとリバーパーク」のようなものを構想したかということですが、ご存知のように、日本経済は今不振であり出口が見えない状況にあります。産業の空洞化が加速して今まで得意としてきた工業分野を日本経済の主軸に出来ない状態になっていて、新しい産業の創出が必要です。しかも、環境への配慮が最大限必要です。「環境を守りながら、かつ経済的にも豊かになれる」そういう産業を主軸にしなければなりません。そのような産業としていろいろ考えられますが、“観光”に関連する産業は環境と経済をうまく両立できる可能性をもっている産業の一つだと考えられております。

観光は産業的に考えますと、21世紀の主軸産業になるといわれていますが、いままですに世界全体で10%の人たちが何らかのかたちで観光関連の産業に従事しています。そして今後このパーセンテージが、非常に高い割合で、世界の経済成長率よりもはるかに高い成長率で上昇していくと予測されています。しかし、この観光に関しましては、外国に観光に行く人は多いのですが、それに比べて外国人の観光客は極端に少なく、日本は国際観光の後進国だといわれています。これは戦後一貫して工業立国をめざしてきたツケのようなものかもしれません。

観光産業というのは非常に面白い面をもっています。例えば、工業化を進めた場合、工場をつくらなければなりません。工場で生産されたものがお金を稼いでくれます。しかし、地域の住民にとっては、ゴミの焼却場のように工場が近くにない方を望みます。工場はやかましいだろうし、煙も出すだろうし、トラックも行かいます。生活環境を守るという点ではない方がいい。しかし、ないとお金が手に入らない。一方、観光資源、これは地域の住民にとっては近くにあった方がいい。地域の住民もそれを楽しめますから。もちろん、ドッと観光客が押し寄せてきたら困りますが。観光資源は近くにあれば、生活環境にプラスでしかもお

金が稼げる。一石二鳥です。いや人が集まりますと他のサービス業も成り立ちますので、一石三鳥・四鳥それ以上かもしれません。

このような視点から観光を位置付ける戦略性がないと、せっかく近くに観光資源があっても生かされないことになります。観光資源を見つけ出し、どういうふうに魅力付けていくかという事が大事です。「筑後川まるごとリバーパーク」は、すばらしい筑後川を観光資源としてどう位置付けていくかの一つの方法です。

「筑後川まるごとリバーパーク」の構想は、筑後川の魅力を経一杯引き出すために、言うなれば、筑後川流域圏全体を一つのディズニーランドのように考えようということです。ディズニーランドのようなテーマパークになぞらえて考えるのは筑後川を矮小化しておもしろくないのですが、わかりやすいので容赦願いたいと思います。ディズニーランドに入りますと、色々なゾーンわけしておりますね。ここは冒険の国だとか、童話の国だとかテーマ別にゾーン分けしています。それと同じように筑後川流域全体をゾーン分けします。ただ漫然とポツンポツンと筑後川流域圏の観光資源を並べたでは魅力をうまく引き出せません。筑後川は全長143キロメートルでそう大きな川ではないのですが、上流・中流・下流とそれぞれ独特の顔を持っています。流域全体も多様な自然と文化・歴史を誇っています。それで、それぞれの地域を特色にもとづいてゾーン分けします。資料では、11のゾーンに分けていますが、これは全くの私の独断と偏見で草案としてのものです。皆様のご批判をお願いしたいと思います。このようにゾーン分けして、ゾーンを色々な要素で特色づけて、それをうまく色々なかたちでつなぐ。例えば、ディズニーランドではモノレールでつないだり、船でつないだりしています。それと同じような形で交通機関なんかをユニークなつなぎ方をすることで、筑後川流域圏というものの魅力をネットワークしようという構想であります。

これによって、「筑後川まるごとリバーパーク」を訪れる場合、今回はこのゾーン、そして今度はどこのゾーンに行ってみたいというような事になります。ある

いは1泊2泊することで、同時にあちこちのゾーンをとということにもなります。季節ごとに色々なイベントなんかと関連させていきますと、年何回も訪れるということになります。

【中村】

実は私自身もですね、冒頭で述べましたとおり、こちらに来たばかりです。まるごとパーク構想、あるいは、まるごと博物館についての認識が、皆さんとほぼ同じレベルかそれ以下ですが、先生に少しうかがってもよろしいですか？

すごく面白い構想だと思うんですけど、今までの色々なテーマパーク、あるいは観光や作り物をもとに客を呼んでやってたのを、今度は本物を出して行ってそれを舞台に人を呼び込んで楽しんでもらおうということでしょうか？

【駄田井】

おっしゃる通りです。先ほど国際観光では日本は後進国だと申しましたが、最近では政府も地方自治体も観光関連産業の重要さを認識してきたようです。それで、外国人観光客の入れこみを真剣に考えようとしているようです。しかし、すこし考え違いがあるようです。例えば、ハウステンボスへの評価ですが、九州観光の目玉として九州知事会で支援しようということになったらしいのですが、ハウステンボスは九州観光の目玉にはならないと思います。少なくとも外国人観光客には魅力のないものです。テーマパークは所詮作り物で、いわば観光の工場のようなものです。やがて、中国や東南アジアに東京ディズニーランドやハウステンボスの何倍もの大きな物が出来るでしょう。九州観光の目玉はやはり阿蘇や霧島、有明海や錦港湾などの自然、長崎、大宰府、日田など歴史と文化ではないでしょうか。今のうちにこれらの魅力を高めることに投資をすべきでしょう。

観光資源の魅力をたかめることでは、本物が大事ですが本物をそのまま出しただけではなかなか観光客を引きつけられません。本物の固有価値に加えて、魅力付けるような何か付加価値が必要です。近松門左衛門は、芝居は、ホントのこ

とばかりでは面白くないし、全くのウソばかりでもおもしろくない。ウソかホントかわからない紙一重「虚実の皮膜」にあるといっています。観光の場合も、本物にうまい味付け、文化の問題かもしれませんが、必要だと思います。

【中村】

その中で、先ほどおっしゃっていた、例えば交通手段ですね。色々あると思うのですが船とか川下り、そういうのも利用してテーマパーク的なものにしていくという考えでしょうか？

【駄田井】

もちろん船は絶対です。それに、簡易鉄道、自転車、馬など、できたら飛行船とかが使えると面白いですが。

【中村】

まさに、国土と交通の利用と活用なんで、我々国土交通省なものですから、非常にありがたいし、関心が非常に高まってまいります。ぜひ、我々の方も最大限一緒に盛り立てていかなければという次第です。

テーマパークという点で、少し皆さんにお話したいと思います。と申しますのも、私自身ここに来る前に岐阜の方に住んでいたのですが、岐阜というところは、皆さんご存知かもしれませんが、木曽三川公園という大きな国営公園があります。木曽川の河川敷を利用した公園です。ここは、実は川がテーマになっていまして、川のテーマパークなんです。もうそういうものが現実にあるということになります。ただ、先生のおっしゃるような流域全体を巻き込んだ本物志向の公園とは少し異なると思います。参考になる事例なので、川のテーマパークとしての国営公園をひとつご紹介します。

場所は愛知県と岐阜県の境目の所に木曽川が流れているわけですが、この中流部ですね、河口から50キロぐらいのところに大きな中州がありまして、今、緑で囲ってありますけどもこの2箇所。この他にも、全体で10拠点くらい上流か

ら下流まであります。そのうちの2拠点をご紹介しますと思います。

左上の丸が岐阜県の川島町というところです。右側の丸が愛知県の一ノ宮市にある拠点です。

東海北陸道という高速道路がありまして、ここから直接入れる、非常に便利ところが公園化されています。左手のほうに、水路が見えていますが、自然共生センターといって川の実験場ですね。実物大の実験ができるというすごい研究施設です。

これは公園の中です。こういう人工の滝がありまして、岩も全部人工的に作った凝岩なんです。

これは、中流部をあらわした部分ですが、木曽川の寝覚の床という観光地があるんですが、そこを模して作ったものです。

これは一番下流。川に見えるんですが、実は人工の川です。こうやって子どもが遊べる。自然の川と違って安全な状態で入れます。決して溺れるようなことはない。今の若いお父さん、お母さんにとっても安心して遊ばせられる場所になっています。

これは、「自然発見館」というんですけど、環境教育ができるようになっています。

今度は、一宮市の方の公園です。国営公園内に大きなタワーがあります。138タワーパーといいます。これは、一ノ宮だから138なんですよ。ゴロ合わせなんですけど。100メートルの高さに展望室があります。

これは公園の内部です。一般の都市公園みたいな感じですけど、実際は河川敷にあります。こういう自然的な部分も残してあります。

もうひとつ。これから作る場所なんですけど、岐阜県側の公園の上流部になるんですが、こういう広大な河川敷がありまして、ここを利用して公園化していこうという構想になっています。現地に行ってみますとこんなところですよ。広い河原



もあります。

これも川原の一部なのですが、たまにオフロード車が走ってるようですけれども、こんな川原があります。真ん中の方に赤い色が見えていると思いますが、ちょっと拡大してみます。

これは最近非常に珍しくなってしまった「ヤマトナデシコ」です。自然の撫子です。珍しくなったというのは、女性のやまとなでしこが珍しくなったという意味ではないですよ。

むこうの地域でも、住民による川づくりが盛んにおこなわれていまして、地元の高校生が作ってくれた模型です。木曾川河川敷をどうしようかということです。これは、水上オートバイを川に入れるためのクレーンなんだそうです。

今度は、筑後川の方ですけど、つい最近、城島町のグループが川の整備構想について絵を書いてくださいました。

こんな具合に、六五郎橋の周辺をこう整備したらどうでしょうかということで、提案を頂いています。今の動きとしては、住民から発案していただいて、我々ももちろんやるんですが、その地区をどううまく利用していただけるかということをやっております。

川のテーマパークで、すでに実現しているものをご紹介しました。これはどちらかと言うと、作り物のほうに属すると思います。

#### 【駄田井】

ありがとうございます。川の利用を促進するプログラムはいろいろあると思いますが、大事なのはバラバラにやるのではなくて、全体的な大きな構想の中でどうもっていくかというような視点ではなかろうかとおもいます。筑後川流域を一つに大きく見てどうなのかという議論をやっていくべきではないかと思うのです。

#### 【中村】

おっしゃるとおりだと思います。我々はずっと河川中心でやってきましたが、

構想を見させていただくと、筑後川をテーマにしてるんだけど、川だけじゃないですね。やはり、山もあれば、海もあるという中で、人間の生活がある。非常に大きなすばらしい構想であると思います。

【駄田井】

特に舟で日田から有明海まで旅をする。これは非常にこれはおもしろい。是非復活できたらと思っております。

【中村】

多分、そういう公共事業であれば、多くの皆さんにご理解いただけて、公共事業のイメージもずいぶん変わるんじゃないかなと期待しております。

【駄田井】

時間もきましたのでこの辺で終わらせていただきます。疑問などはあとのパネルディスカッションで出していただけたらと思います。

どうもありがとうございました。

## ＜パネルディスカッション＞

### ～筑後川流域とツーリズム／その手法と可能性～

コーディネーター 西川 芳昭

パネラー 船津 武士 坂本 茂木

西田 豊 坂井 圭子

鶴 秀穂 立花 民雄

田上 敏博

【西川】

皆さんこんにちは。ご紹介いただきました、西川と申します。よろしくお願いします。

今日は、シンポジウムの後半は～筑後川流域とツーリズム／その手法と可能性

～というテーマでパネルディスカッションを進めてまいります。5時前ぐらいまで、約2時間の予定で進めて参りたいと思います。途中、パネラーの皆さんに思いのたけを語っていただくと同時に、フロアーの方からもできるだけお話していただけるようにしたいと思います。

最初にパネラーの方々、自己紹介を兼ねて、お一方4～5分でそれぞれのグループの紹介を、上流の方からお話していただけたらと思います。

では、『九重の自然を守る会』から船津さんお願いします。

### 【船津】

『九重自然を守る会』の船津でございます。本日は、会長の嶋田がお邪魔することになっていましたが所用の為、ピンチヒッターで私が九重のことについて紹介させていただきたいと思います。私でわからない所は、仲間が来ておりますのでそちらの方をお願いしたいと思います。

私たちは、筑後川の源流ということで、九重山系があるわけですが、昭和30年代に入り、九重を訪れる人が少しずつ多くなってきました。したがって、九重を紹介するために飯田高原ガイドクラブというのを作りまして、そのガイドクラブが中心になって九重を訪れてくださる人たちの道案内、それからゴミ拾い、登山道の整理。そういう事をやっておりまして、お客さんがそのうちに九重のやまなみハイウェイ、ようするに九州横断道路が完成しますと、たちまち各地から九重を訪れる人が多くなりました。と同時に山も荒れて植物もなくなっていく、美しい草原に車が入る、九重を何とかしようということで、当時の厚生省、国立公園部ですかね？管理官と営林署の担当官、それから、町の駐在所、郵便局長さんそういう方々が集まって、『九重の自然を守る会』が発足したのは、昭和36年だったかと思います。「守る会」としては、40年の歴史をもつわけですので、かなり古い歴史ではないかという風に思っております。

現在、どういう活動をやっておりますかと言うと、草原の維持ということで野

焼き。実は今日、九重に坊がつるといのがございますが、その野焼きをする予定でしたけども、こういうような天気だったものですから1週間延期しております。飯田高原の方も野焼きをやります。ただ、草原の維持ということで野焼きをやっていくわけですが、最近は牛馬を家の方で飼育がなされ、放牧がなくなって、それから、ごたぶんにもれず高齢化と言いましょうか、放牧、野焼きをするには、かなりの労力が必要としますのでそれが出来ないと言う事で、ボランティアで、私たち「守る会」を中心に特別に草原を残しておきたいというところには、「守る会」を中心に野焼きを進めております。

九重の玄関口、長者原では毎週日曜日に自然観察会というのをやっております。このパンフレットを作りまして、春から秋、春から夏へとといった小冊子を作って、訪れる人たちを私たちの仲間がボランティアで自然観察会を行なっております。そういう風にしながら、訪れる人たち、子どもたちも含めて全ての人々に、自然を紹介して多くの人に自然を理解してもらおうというような活動をしております。よろしくおねがいします。

#### 【西川】

どうもありがとうございます。

続いて、小鹿田焼の窯元の坂本さんをお願いしたいのですが、よろしくお願い致します。

#### 【坂本】

紹介いただきました、坂本茂木と申します。ただ今の、九重の船津さんと同じ大分県でありますけども、私の方はごく西の果て、福岡県の境であります。

御存知の方がおられると思いますが、福岡県小石原村に小石原焼という窯元がございます。私の方はそこから分かれて来た窯であります。ちょうど300年ほどになるんじゃないかと言われております。それからさらに分家が始まって、現在は10軒の窯元となっております。が、諸々の条件で窯が増えることがむずかしく

なりました。おそらくこれからも増える事はないと思います。最近、スローライフという言葉をよく聞きますが、まさに私の仕事はそれでありまして、陶土の乾燥が不思議なほど時間がかかりまして、急ぐことが出来ない仕組みとなっているのです。それが、窯を増やさないし、機械を敬遠してまいりました。実にスローなのであります。ある先生が、8年程前、国の文化財指定を受けました時に、1周遅れの1等賞と申しましたが、1周遅れどころではありません。

どうぞよろしくお願いします。

#### 【西川】

ありがとうございました。上流お二方のご発言がありましたが、ひき続いて、中流の方からお二方来ております。端の方から、『山苞の会』の西田さん、よろしくお願いいたします。

#### 【西田】

『山苞の会』の会長をおおせつかりまして、今年で8年目でございます。私は、田主丸生まれでございますが、色んな家の関係で田川・豊前を経て大学を卒業しまして、一番最初に、田主丸の柴刈村というところの小学校の教員をいたしました。終戦直後でございます、4年生男子60人をもってですね、夏は準備体操をして、筑後川に飛び込め！と言って、向こう岸にたったひとりで渡しました。向こうで相撲を取ったりして時間がきたら帰るぞ！と人員点呼をしてまた連れて帰ります。こういうことをして、筑後川は非常に懐かしい川でございます。生徒を帰した後は、そこで筑後川のスケッチをしておりました。

その後は、中学校の美術の教師をいたしまして昭和58年に退職をいたしまして、田主丸に帰ってきました。そして、耳納連山の麓に家をたてております。もっぱら、絵を描くことに没頭しようということでアトリエを大きく作ったんですが、2～3年しまして由布院に『空想の森美術館』というのがありまして、それを見にいきまして、これはいくらくらいかかりましたかと聞いたら、5千万円ぐらい

でできましたと。それくらいなら、皆で金を出し合えばできるんじゃないだろうかということで、耳納山脈美術館建設と言う運動を起こしました。最初は15～6人でございましたが、何回か集っているうちに地域の文化意識を深めるために、この農免道路と昔から言っておりました道路に、愛称を付けようじゃないかということで、「美術館を実現しようの会」から「農免道路に愛称を付けようの会」になりまして、公募いたしました。そのトップになったのが『山苞の道』という名称でございます。これは非常に昔から万葉集とか源氏物語にも用いられている日本的な名称で、いい名前ができたので、会の名前を『山苞の会』にしようということで『山苞の会』ができました。それは平成7年でございます。

そしてイベントを毎年やってきております。11月の2・3の2日間です。大体定着いたしましたので、3年目に第12回農村アメニティーコンクールで準優勝を全国でいたしました。非常に来客も多くなってまいりました。昨年で第8回目のイベントを終了したところでございます。一番最初は、美術館を建てようという時には15～6人の人数でしたが、現在は70名の会員になっております。その会員は色々な職業でございまして、会社を経営する社長さんとか公務員とか、ぶどう、柿、あるいは植木とかたくさん作っておりますが、そういう農業をされている人とか、その他、建設業、酒製造の方などがおられます。そういった会員の中に思いがけないものですが、文化的なこのギャラリーとか、版画工房、木材とか竹工芸、人形制作、竹炭、陶芸を作る人、写真をやる人、ステンドグラスを作る人。そういうような美術工芸をする方たちが続々と移り住んでまいりました。現在、そういう方たちが会員70人の中に、17人おります。そういうところで、柿狩りやぶどう狩りをしながら、美しい景観を眺めながら、文化工芸に接することができるというような状態が、現在に至っております。

活動内容、経営の実際については後ほど発表したいと思います。

今日はよろしくお願いします。

## 【西川】

続きまして、『あまぎ木こりの会』の坂井圭子さんよろしくお願いします。

## 【坂井】

皆さんこんにちは。甘木市の『甘木きこりの会』の事務局の坂井圭子と申します。『あまぎ木こりの会』というのは、任意の市民組織なのですが、もともとの発足は1995年。今から8年くらい前になりますけども、甘木市の農林課が、台風17号19号でとても荒れてしまった甘木市内の森林をどうしたらいいのか、市民参画のもとに、森林資源をどうするかというビジョンをたてたいので、提言書を一緒に作りましょうということで、集まったものなんです。

その後、委員会を発足して提言をしたわけですが、『あまぎ国際木こりの森構想』という提言書を出したあとに、提言したはいいがあとは知らないでいいのか。やはり、出しっぱなしではいけないということで、その後、また委員会のメンバーで市民組織『あまぎ木こりの会』を発足させ、その後も行政と一緒に政策を考え、実践を積みながら今日に至っています。

私たちの会には色んなメンバーがいらっしゃいます。会長さんは石井さんといまして、環境カウンセラーをなさっているんですが、その他に自営業さん、農業、林業、教師、お医者さん、郵便局長さん、退職された方、神主さん、デザイナーさんなどがいらっしゃって、それぞれのお立場からいろんな考え方を出し合っていますね、わいわいやっている会なのです。会そのものが何かイベントをやるというとか、そういったものは無いのですが、いつも集まっては知恵を出し合って、まとめて行政に持っていくという、そういう役割の会です。甘木市というのは、中流域という風に位置付けられていますけども、だいたい、歴史的には門前町として栄え、秋月の黒田藩や日田のほうに行く境目のちょうど交流地点にあって、そこで泊まっていくとか、お宮にお参りに行くとか、そういった形で、商業も非常に栄えている町です。

私は、大牟田市との境目の荒尾市で育ったんですけども、そこは三井三池さんの炭鉱の町ですね、非常に河川が汚い町で、大牟田川のあの汚いヘドロ川ですとか、私の生家の前を流れている時々オレンジ色の水が流れる川ですとか、そういった川しか見て育たなかったものですから、甘木市というところに来て、本当にその水の美しさというものに心酔いたしました。こんなにすばらしいところで生きて行けるという事は、それだけで、ここはタカラモノなんだと。やっぱり地元にいると気がつかない、なかなかそれがタカラモノだと気が付かないんですね。住めば住むほど本当に素晴らしい所で、だけど何となく甘木市の皆さんっておとなしいってというか、交流・連携がどことなく苦手なようです。それで、『木こりの会』で、とにかくでしゃばって外に行きましょう、活動を自分の地域の素晴らしさをもっともっとアピールしていきましょうという使命感のもとに活動をやっています。

活動のコンセプトは、資料の中にも書いていますとおり、社会資本である「森林資源」と、命をつないでいく「水」です。水って勝手に蛇口から出て来るような感覚なんですけど、初めて昔、井戸水で生活していた時代から比べると、非常に水道からジャブジャブ水を使って当たり前のような感覚なんですけどそうじゃない。この「水」というのは循環資源をどう大事にしていくかっていう、そういった水源の方に向けた取り組みをやっています。それと、自分たちの地域をオンリーワンにするための、色んな水源地政策、里山の哲学の再生などですね。

『木こりの会』の主な取り組みといたしましては、提言書を策定したあとはですね、あらゆるところと、交流・連携を進めていくということ。それから、最近ではダム建設に伴う過疎化の問題がとても深刻になっていますが、今日は九州整備局の方がみえていますけども、水源地域をどう振興していくかという地域ビジョンの策定、そういったことを皆で考えていくこと。それからもうひとつ。甘木市水ひかる課というのが、それまでのダム対策室から名称を変更しました。この課



の取り組みは、ダム対策による水源地特別対策法というのがあるんですけど、その補償だけでやっていくっていうことじゃなくって、これからの中山間地域をもっと大きな目で、今日のような筑後川まるごとリバーパーク構想のような大きな大きな地域ビジョンの上で、河川のことを考えていくということで行政と共に頑張っています。

### 【西川】

ありがとうございました。上流・中流とお二方ずつお話していただいたんですけども、続いて下流のほうから『水の会』の立花さんお願い致します。

### 【立花】

柳川『水の会』の立花でございます。

『水の会』は昨年の5月まで、広松伝さんが会長をなさっていました。ずっと、広松会長のもとでの活動が盛んだったわけで、この1年間、広松さんが亡くなられて休眠状態でしたが、それでも何とか、復活していこうという事で細々と続けて再開しているところでございます。

今日はこの筑後川まるごとリバーパークというんですか、筑後川をグリーンツーリズム、あるいは観光という面でつなごうということでございます。私は柳川で観光業をやっておりますけども、今日はここに並んでいらっしゃるパネラーの方々に、観光業の方は他にはいらっしゃらないようですが、大変こういうつながりが面白いなと思います。

戦後の観光は名所旧跡めぐりから始まりました。名所と言うのは、旧跡歴史がきちっとわかっている人たちが見て感じる所だったんですけど、全然今、歴史が勉強されていけませんのでそこを見ても大事な所がだいたい何のことなのか全然分からないと。意味がわからないところのものをながめたり、庭を眺めたり、石を眺めてもどうもピンと来ないということで、名所、旧跡の観光地というのは大変今苦戦しております。本当に筑後川の河口のどちらかと言うと、柳川市が筑後川

に面している所はもう海でございます。大川のさらに下の有明海というところですけども、筑後川のとなりという形でしょうか。柳川での水系はもう一本南の矢部川という水をひいておりますので、ちょっと筑後川と雰囲気が違うかもしれませんが。この下流流域というのは、大川もそうですけど水郷と言われてはいますが、大変水に苦労したところで、真水をとるのに海から水を取らなきゃならない。いわゆるアオ取水をしなきゃならないというほど、水に苦労をしているところでございます。そういうところだからこそ、水郷の文化が発達していったところです。

城下町と相まって、柳川は、まるごと博物館です。今の柳川市というのは、もともと有明海だったところですから、100 %柳川市というところは、干拓開発されてできた人工の街でございます。柳川の風景は人がつくってきた労働の風景です。風車でもあればオランダとそっくりです。何百年もかかって有明海の中に街を作って、今の街ができてるわけですから、その水門樋管の管理というものが、大変巧妙にできてまして、これが、柳川の掘割を維持しているわけです。先月行なわれました、毎年ですけど1年に1回城下町の掘割の水を抜いて、川掃除・掘り掃除をし、そして、2週間ぐらい天日干しをしてまた新しい水をひくということで、それは、かつて柳川の掘割が全て飲料水であったという風習の中から、いまだにその河川清掃も含めて、水落とし、掘り干しというのが行事としてなされております。そういう、水の文化もあると同時に、非常に水が豊かと言うと決してそうじゃなくて、いつもピーピー言いながら、上流の方に水をなんとか分けてくださいということで、大変水に苦労してるところであります。

また、今ちょうど、柳川は九州全域と連携しながら、おひな様祭りをやっております。柳川だけでなく、日田だとか人吉だとか、あるいは吉井、佐賀そういうとこと組みながら、お客さんにひな祭りというシーズンに九州に来て下さいということで、今、柳川さげもん巡りというひな祭りの最中です。明日が人間おひな様を仕立てた水上パレードがございますので、どうか、時間がある方はご覧下さ

い。

### 【西川】

ありがとうございました。

引き続きまして、下流大川の方から鶴さん、お願い致します。

### 【鶴】

皆さんこんにちは。おてもとの資料の最後から2ページ目になるんですけども、先ほどの立花さんがおっしゃいましたように、筑後川最下流の福岡県からなります。上手に喋れないので申し訳ないのですが、よく似たような境遇のところですよ。水が欲しいときには水がない。水がいらないときには、どっと押し寄せてくる。ということで、平均して水を流していただけたらありがたいということで、水に感謝をしよう。とにかく、筑後川があってこそその大川の町。先ほどの柳川の方もそうですが、大川の町も筑後川があってこそ誕生した街です。昔は、日田・小国のほうからいかだを流してもらって、それを大川の港で大量に運ぶ大きな船に寄せ代えて、生計を立てていた街です。一旦、大川の町に集まってきてたということで成り立ってきた街です。その中から、先人たちが知恵を絞りまして各産業をもとにして数十年前に興した街であります。

われわれが16年前に、何とかこの筑後川というものを、もう一回見直そうということで始めましたが、ご存知の方もいらっしゃると思いますけど、筑後川フェスティバルというものを、とにかく川に親しんで、川と楽しんで、川に感謝しようということで、勝手に始めたイベントです。何の意味もない、誰にも強制しない、単純に筑後川で遊ぼうと。その中から、川に対する感謝の気持ちが少しでも多くの人に広がればなということで始めたところが、最初はこんなに16年間も続けるつもりは無かったんですけど、それに参加された皆さんから、ぜひこういうイベントは、流域全体で盛り上げないかんというご意見が大勢を占めまして、それじゃ、何とかやってみようということで、いろんな流域の皆さん方には、

公私共にご迷惑をかけながら、何とか16年間、この筑後川フェスティバル、筑後川に感謝をしようというイベントを続けることができました。

先ほどからいっておりますように、流域の皆さん方のいろんな地域地域の情報だとか、産地の特産品であるとか、色んな地域の個性があると思います。その個性を大事にしながら、筑後川という一本の幹でつながる方法はないでしょうか？ということも合わせて流域の皆さん方に考えていただくためのイベントということです。イベントをすることを目的としておりません。このイベントを通じて、自分たちの地域を見直してくださいと。そして、自分たちに何ができるのか、そして、自分たちがどこまで手を携えていけば、ゆかいな暮らしができるのか、そういうことを考える日ということを設定したいという風に考えております。

だいたい流域全体をふたまわりくらいしましたんで、今年からは、ひとつのもう一步大きな心の原点を見つめ直して、考え直したいという風に思っております。また、ここにご来場の皆さん方にですね、いろいろなアイデアがございましたら、ぜひいただいて、持ち帰ってですね、今年の企画、これからの企画にですね使わせていただきたいと思いますと思って、今日まいっております。

どうか最後まで、よろしくお願いします。

### 【西川】

最後に、フェスティバルのことで、流域の連携のことについてもふれていただきました。ありがとうございます。今日は、地域の方々に加えまして、国土交通省九州地方整備局の方から田上さんに来ていただいております。

先ほどの、『木こりの会』の時、行政との連携というキーワードがいつも出てきたと思いますが、行政の方の立場から、ご発言をいただけたらと思います。よろしくお願いします。

### 【田上】

みなさんこんにちは。私、国土交通省の田上と申します。

私の出身は熊本です。緑川の上流で育ちまして、どちらかという清流で育ったほうです。筑後川でも10年前くらいに、仕事の経験がございまして、筑後川についても、多少知識はあると考えております。

今、国土交通省のと言いますか、平成9年に河川法を改正いたしまして、従来の治水と利水ということで、二本の柱でやってきたわけですけど、平成9年に環境ということを一つつ目的に加えまして、それともうひとつ、河川の整備をするときは、住民の意見を聞く住民参加を今回、法改正いたしました。それといたしますのも、今、川に対して非常になかなか関心が薄いといいますか、それは、今までやってきた河川行政が原因かもしれませんけれども、もう一度住民の方に川に関心を持ってもらおうと。やはり、川を地域作りにどうにかして活かせないかというのを今考えております。住民の方に関心を持ってもらうとは、川に魅力がないといけないということで、私たちもこれからの河川行政は、川の魅力を引き出すような河川行政といいたらいかがでしょうか、そういうことを心がけにやいかんと思って、取り組んでおるところでございます。今、九州でやっていますのは、まずはそういう流域連携とか、九州の流域間連携といいますか。そういったことを非常に推進しておりまして、特に、人と人とのつながりといいますか、そういったことをやっております。以前に遠賀川を担当していたんですが、昔はハードな仕事をばかりをやってきたんですが、初めて遠賀川に来まして住民の方と一緒に、まずは勉強会をしようというような形で色々始めてですね、交流会を発足しました。その中で、これからの遠賀川の姿とか、そういった活動をしてまいりました。そこで、色々知り合った現場の方とかですね、今、遠賀川の川作りを非常に盛り上がってですね、一生懸命住民の方が今やってもらっています。九州の流域連携の母体となっておられるような、筑後川と流域連携倶楽部と一緒にですね仕事をさせていただきまして、非常に流域連携というか、住民と住民の方の連携も非常に大事なのですが、私たち行政と住民の方との連携というのも非常に大事で、それ

がこれからの九州の川作りのキーワードだと私思っています。私、福岡にもう3年目になるんですが、九州の流域間連携をどうしても推進したいという事で、一生懸命そういったことを取り組んでいるところでございます。

うちの整備局の取り組みについてはこのあと御紹介したいと思います。よろしくをお願いします。

### 【西川】

ありがとうございました。あとで、実際に構想をどうしていくかということで田上さんの方から、色んな事例について御紹介いただけたらと思います。

今7人のパネラーの方から自己紹介とそれぞれの活動について紹介をしていただきました。自然保護・森作りのような自然に直接関係するものから、工芸のようなどころから始まったグループ、最後の方では、筑後川フェスティバルのように連携、まさに今回のテーマであるような連携について、それから観光、『水の会』としての立場もありますけども、企業としての立場からの観光についての視点からの発言をいただきました。

様々な発言がありましたけども、やはり筑後川ですから水というのが一番のキーワードになるかと思えますけども、それを捉える捉え方の中に自然がまたありまして、そのあと、文化・芸術・工芸のようなものがある。それらが地域の人々の生活につながっていく、それぞれの自己紹介の中で、各グループが活動されていることが紹介していただけたかと思えます。

第二回目の発言に関しましては、リバーパークシンポジウムのテーマに直接関わる形での発言をお願いしたいと考えておりますが、前半の駄田井さん、中村さんの対談の中でリバーパークの構想について紹介していただいたわけですけど、それぞれパネラーの皆さんの活動との関係またはご経験なり、将来の計画中で、リバーパークの可能性なり、期待という部分についてご意見いただけたらと思います。それと合わせまして、皆さんのお手元にも配られてると思えます、ゾーン

案というのがあります。地域のそれぞれの宝物・本物をそのまま見せるのではなくて、付加価値をつけていく。その中で、付加価値をつける一つの方法として、バラバラでなくって全体として何か見せていく必要があるんじゃないかという発言が対談の中であったわけですけど、その一つの方法として、1～11のゾーンわけがあります。このゾーン分けについても何かコメントなり、アイデアなりがありましたら、合わせてご発言いただけたらと思います。

6名の方の発言が終わりましたら、フロアーの方からも色んなコメントをいただきたいと思いますので、ご準備いただけたらと思います。

それでは、順番を逆にしまして鶴さんのほうから発言をお願いします。

**【鶴】**

そうですね。ゾーン化。11の区切りが良いのかどうかは、ぜひ11の地元の方に聞くのが一番はやいと思うんですけど。基本的には生活環境が、似かよった地域で色んな共生の道を探されるのが、一番無理がなく、スムーズにできるんじゃないかなと。

私たち、大川の町でなにができるか、今考えておりますけども、思いつきません。ただ、先ほど言いましたように筑後川フェスティバルを通して、私の個人的な想いといいますのが、先ほどから何度も言いますように、私が生存している原点が、筑後川の母なる大河だと思っています。ですから、下流から中流・上流に対して、私個人的に何か私にできることがあればということで、いろんな活動をしています。特に日田の皆さんなんか、ありがたがっていらっしゃるのか、迷惑がっていらっしゃるのかわかりませんが、いつもいつもおじゃまして申し訳ないんですけども。そこの、いわゆる気持ちのつながりが、いろいろひらけてくれば流域の中で、うちにおいでよとたくさん出てきてくれるわけです。ツーリズムも含めて非常に大きな可能性を持っていると思います。フェスティバルをやり出すときに、国土交通省の方がいらしゃるのであれなんですけど、55市町村、125

万人の住民が住んでいるんですよね。ただ、残念なことに、熊本県・大分県・福岡県・佐賀県にまたがっているということでございますんで、筑後川流域で合併したら、大きな県ができるかなと。そしたら皆、共有財産を持っていますんで、いがみ合うこともないんじゃないかなというようなことも、大それた切り口として考えてもいいんじゃないかなと。非常にすばらしい財産がこの地域にはある。そのすばらしい財産を地域地域で生かすことが、このまるごとリバーパークの可能性のような気がします。

### 【西川】

ありがとうございます。

フェスティバルのご経験から、上流と下流の交流から、更に流域圏の合併のお話までご発言がありました。ありがとうございます。

引続いて、立花さんお願いいたします。

### 【立花】

柳川の方は先ほどご紹介し忘れてたんですけど、『水の会』ができたきっかけというのは、もはや古典的というべきなんですけど、柳川掘割物語という映画ができて、それから数年後に第5回の全国水郷水都会議というのを柳川で開きました。そのときに、最初の掘割物語ができたときに、こういう会を作ろうよと言ったとき、よしやろうと言ったとき、300人くらい集まりました。300人くらい集まると、こんなにも集まって何するのという話になって、これちょっとやばいよということで、しばらく時間をおいて『水の会』というのが、水郷水都会議のあとで発足しました。

その『水の会』は、それでも当時は大変な人だったもんですから、まず勉強会を始めようということで、各地に色んな水環境の団体ができつつある時で、理論武装をして、その団体をきちっとフォローできるような勉強会だけはしときましようということで、広松会長を主体に今の勉強会が始まりました。今は、各地に何



百という団体ができておりますので、そういう勉強会だけではなくて我われも実践しようということで、上下流の交流ですとか、自分たちの堀割りの見学会などを行っています。いわゆる、このリバーパークもそうですけど、自分たちの町を売り出していく、あるいは自分たちの所を売り出していくときに、自分たちが一体どんなところに住んでいるのかというのが、考えるとわかっていない。私たちは『水の会』だけじゃなくって他の団体も含めて、観光の場合は特にそうなんですけど、アイデンティティーの発掘というのはもっと徹底的にやりましょうよと。自分たちの足元を、柳川というのは一体何なんだということで、どういう生い立ちでこの柳川が生まれてきたのか、そして、どういう歴史を持っているのか、どういう文化性があるのか、グリーンツーリズムの方からすれば、生活文化の観光ですので、今我われが暮らしている文化が、どういう形で変化をしてきて今あるのかという、足元を見ていかないと、よそでこんなことやってるから、これやろうというのは、決して根付いていくことではございませんし、古いものを古いままにしていくと廃れてしまう。かといって、新しいものをポンともってきて、なかなか根付かない。古いものをどうやって新しくしていくかっていうイノベーションをしょっちゅうやっていかなきゃならんだろうと思います。とは言いながら、自分たちの柳川でも実は、柳川が観光客を引き込もうとしているんですけど、観光に携わっている人たちがちっとも自分たちの歴史をご存じない、勉強していないというのが大勢たくさんいます。そこで、足元の歴史や文化を学びながら、これからの連携をやっていかなきゃならないと思います。

それと、先ほど申し上げましたように、この筑後川という大きな流れと、もうひとつ、その南にある矢部川とをぐるっと回った、筑後川と矢部川の流域連携ができれば、もっと楽しくなりそうだなと。先ほど、鶴さんが言いましたように、私も全く同感なんですけど、治山治水というのが政治、行政の要諦。あるいは観光でも、どうしても行政と一緒にならなきゃなりません。その時、治山治水とい

う観点がずっと流域の一体管理というのがなされないと、非常にやりにくいと。と言うのは、水に苦勞しながらやってるところでございますんで、流域合併というのは当然のことですと。合併の方向が経済力で合併の話ばかりして、とんでもない話です。治山治水の方向で合併を考えないと、流域合併というのが当たり前じゃないですかというのは、治山治水という言葉は何百年、何千年も前から言われていることを、現代人が忘れてるんじゃないかなという風に思います。ですから、観光という、暮らしの文化というのも流域の中から出てきてますので、上だ、真ん中だ、下だじゃなくって、一体になった話をしていかないとどうもこれからつながっていかないんじゃないかと思います。可能性は大いにありますし、大変楽しい構想だなという風に思っております。

#### 【西川】

どうもありがとうございました。

皆さん、今日のシンポジウムのチラシをお持ちかと思うんですけど、そのチラシの中に筑後川流域にはタカラモノが満ちあふれています。そのタカラモノと付き合ってきた人々の歴史遺産や文化があります。タカラモノ本来のあった場所で、しかもできるだけ生きた形で付き合い、学ぼうとするのがこのリバーパークの元にあった博物館構想なわけですけど、それを、現在の我われの生活に生かしていくのがリバーパーク構想です。今、柳川の事例から具体的にご紹介いただけたかと思います。

引き続いて、甘木のほうから坂井さんをお願いしたいと思います。

#### 【坂井】

中流域の甘木市です。中流域と言いながら違和感があるんですけども。というのは、甘木市というのはご存知のように、大きなダム、江川・寺内ダム2つがありまして、さらに、もうひとつは小石原の上流にですね、第3ダムの洪水調節ダムの小石原ダムが建設予定です。もう認可されていてOKがでてるんですね。3

つのダムを抱えちゃうんですよね。そういう意味では、甘木は上流域で水源地帯なのです。ダム開発に対しては非常に厳しい目があるんですけど、私どもはしながら、水を大都市を含む経済圏に送っていく責務があるんじゃないかというところで、ダムとの共生、そして水を生み出す森林との共生ということで、町づくりを進めているわけです。

今日のテーマになっているリバーパークの可能性なんですけど、先ほどの対談の中で駄田井先生が、ハウステンボスとシーガイアはテーマパークではあるけども、全体の経済性にずっと結びつくのかということをおっしゃいました。私もまったく同感で、全然行こうという気にならないんですよ。私の連れ合いが、宮崎県の日南市がとっても好きで、日南海岸に年2～3回行くんですけど、シーガイアができた頃にですね、「バカバカしい」って言ったんですね。あんな所の何が面白いのか。真横に本物の太平洋の海があるのに、あそこで泳ぐのが良いんだよって。私は、ぜひ行きたいと言ったんですけどね、本当に愚の骨頂としか思えないと言うのです。1回だけ無理やり連れて行ってですね、連れ合いを。入ったんですけど、入っただけで6千円か何かとられてですね、中でまた飲み食いしてたら1万円くらい使って。何か、ふんだりけったりでですね、人工の汚い波にさらされてって感じで。それと同じようなことが、おそらくハウステンボスさんにもあるのかなと。ああいう人工の外国の街に行ったような気分になって騙されてるというのは、私たち市民側がしっかりしてないと。本当に心が豊になるものは何なのかということを、これから真剣に考えていく時代だと思っています。つまり、人間中心の開発から、今日の中心のテーマである持続可能な開発へという風に、すべての分野に移行していかないと、そしてそれを経済性に結び付けていくという風に考えていかないと、やはり行き詰まってしまう。経済中心、私的財産を増やせばいいという、それだけの稼げば良いという感覚だけの開発というのはもう、終焉が見えてきたという気がいたします。

先ほど、九州整備局の田上さんがおっしゃいました、河川に関心が薄い現代人ということなんですけども、じゃ、なぜ関心が薄くなっちゃったのか。皆さん、子どもの頃、一生懸命川で遊んだ記憶があります。魚をつかみ取りした記憶もある。だけれども、なぜこんなに関心が薄くなっちゃったのかというと、やはり、川に住民が近づかないように、ずっとそういう行政をやってきたんじゃないかと。甘木市でもそうです。あんなにきれいな川を三面側溝で雨どい化しちゃってですね、シューシューと水が流れていく。子どもがもしコケたらそのまま下流までシューと雨どいのように流されて行っちゃう。そこにいた生物の住処もなくなってしまう。農家は、農薬をどんどん流しちゃう。川に近づくのはコワイんだ、行くな行くなと。私たちのような上流の甘木市でさえも、汚い、ダメだ、コワイと、そういう風にずっと教育をしてきてるわけです、子どもたちに。このような状況下では、川というものを生活の中に身近になるというのは、まず難しいんですね。だからそのところを、今本当にきれいな川を知っている最後の世代の私たちが元に戻していくっていうことを努力してやっていかなければいけないと思っています。

また元に戻りますけど、リバーパークの可能性について申しますと、例えば、甘木市にはタカラモノがあって、黄金川の、日本で唯一取れるスイゼンジ海苔。熊本市の江津湖でも採れていたんですけどそれが絶滅してしまっただけで、今では、甘木市で唯一川茸が採れてます。それから秋月の歴史ですとか、平塚川添遺跡、和紙や博多織などの伝統工芸、甘木独自に残る盆にわかといって、古い歌舞伎の舞台ですとか、それから、もちろん皆さん御存知の、採れたての本物の味のするフルーツや野菜。そういったものをですね、本当に豊かに楽しみましょうという構想ができると思います。できますけど、それをどうつないでいくかというのが、これからの課題です。先ほど立花さんがおっしゃった、生活の文化を経済性に結び付けていくということで、今日は、実はお友達を連れてきているんですけど、

実際にそれを今実践してくださっている方々に、ちょっとコメントしていただくかなと。

先ほど申し上げました、江川ダムの直下に住んでいらっしゃる下戸河内地区の女性部の方たちなんですけども、この地域の方々は、ダムの直下に住む恐ろしさを毎日体験していらっしゃいます。ひょっとして、あの堰堤が壊れたらっていう。それは、甘木市の下流に住む私たちでも何処に逃げようかっていうほどです。ここ数年来、ダムの管理事務所のスタッフの皆さんと、とっても仲良くさせていただいています。最初は距離を感じて近づけなかったんですけどね、何とか近づいてゴリ押しで仲良くなって、色んなお話をうかがったりすると、「満水時は1センチずつズレてるんじゃないか」っていうんですね。（笑）本当ですよ！満水時は怖いよねって、江川の人たちは言うんですけど。そんな恐怖の中にいながら、でもこの地域が好きだ、愛してる。どうしたら、持続可能に私たちが生活文化を守りながら、この地で生活していけるのだろうかというようなことをですね、一緒になって考えているわけです。

今日は地元のお2人がおみえになってます。ちょっとお取り組みの紹介を簡単にお願ひできますか？

#### 【甘木木こりの会メンバー】

そうですね。パンフレットにも書いておりますように、私たちは江川ダムの直下に住んでおりまして、21軒の集落なんです。それで、村の活性化またまとまりとかを考えまして、平成13年から、地域でできました品物を売ります直売所がスタートしました。それで、地域の生産者と消費者との交流をはかっているところです。直売所といえは、安全とか新鮮とか安いというのが当然だと思いますけども、私たちのところの品物を、自分たちが毎日口にしているものと同じですので、その点では、本当に安心して食べて頂きたいと思います。それで、収益金の一部を地域の山林、河川の手入れ、環境を守るための基金にしております。

また、江川ダムを利用されている都市圏の人たちに、水の大切さ、また水源地の実情を知っていただきたくて、年2回交流会を行っているところです。ダムの直下の見学とか、集落の後方を流れております谷川の見学、野菜の収穫体験、また特産物であります手作りのコンニャクの実演会、餅つき大会などをいたしまして、交流をはかっているところです。また、昼食には地元で取れました新米のおにぎり、お野菜のたっぷり入りました豚汁などを提供いたしまして、交流をはかっております。また、そのためには、地元住民が一体となって総出で前日より準備をいたしまして行っています。

それから、江川にはたくさんの山林がありまして、その中をぬうようにして谷川が流れております。この谷川は、住民の生活用水にもなっておりまして、その収益金の一部を使いまして、この谷川の水を守るためにパンフレットに載ってまのような、看板立てをいたしまして、これから先には、山の保水力を保つために山林の手入れをするようにしています。間伐などをいたしまして、雑木などを増やしまして、下草が生えるようにして、このきれいな谷川をいつまでも残すように努力をしているところでございます。ほんの初歩的なことですがけれども、私たちは水の上流に住んでると思っておりますので、除草剤の使用を最低限度に留めるとか、川には絶対ごみを流さないなど本当に初歩的なことですが、日々努力をしているところでございます。

直売所を開設したことによりまして、こういうシンポジウムにも何回か出席させていただくようになりまして、水に対する自分たちの気持ちも変わっていったことは事実でございます。水源地に住むものとして、少しでも何かできないかなと努力をしているところでございます。

#### 【坂井】

ありがとうございました。今お聞きになってお分かりになったと思いますけど、上流の住民の皆さんがこんなに気を使って、共有財産である「川」や「水」を大

切に守っているわけです。「おしっこしたらあそこが腫れるぞ！」という風にですね。そういう生活文化の知恵や習慣があるんですよ。下地河内地区は21戸の集落なんですけど、本当にまだコミュニティが残ってて、誰かに不幸があれば、皆で泣いて、誰かに喜びがあれば、皆で手を取り合って喜ぶといった、これが本当の豊かさのなごりというか、本当にこれから守っていかなきゃいけない。それから、蛇足ですけど、犬ならぬ鹿を飼っているお宅も。そういった私たちのすぐ近くにあるけども、あまり知られていないすてきなところですよ。

### 【西川】

ありがとうございました。

非常に具体的な思いと活動を紹介していただいたかと思いますが、特に、水を送っていく責務というんでしょうか、ダムとの共生というんでしょうか、そのあたりの上流、水源地の生活文化、そういったことが間違いなく、記憶に残ったかと思います。

引き続きまして、『山苞の会』西田さん、お願いします。

### 【西田】

リバーパークの可能性と期待、あるいはゾーン分けに対するコメントということですが、田主丸は町全体がそっくり筑後川県立自然公園の中に入っております。これだけでも十分リバーパークの可能性があると思うのですが、田主丸は7つの校区、7つの小学校があるのですが、校区の名前が非常に川や水に関係のあるところが多いです。まずこの『山苞の会』が大部分所属しているところが、水縄校区。水の縄と書きます。それをミノウと読みます。あれはどこから起こったかと言いますと雨季になりますと、耳納連山からちょうど水が縄をなうように流れてきたと。それが何本もですね。

それから『山苞の会』の隣り。これは川という字に関係ありませんが、武野と言いまして、自然そのものです。

その隣りが川合と言うんです。川が合う。二つの川が合っているところという意味です。

そして、そのお隣りが先ほどいいました柴刈校区なんです。これは川の字は関係ないんですが、よく考えると桃太郎の話はここから出たんじゃなかろうかと。お婆ちゃんは川に洗濯に行って、おじいちゃんはこの耳納山に柴刈りに行ったんですね。そうしないと、この薪がないんですね。私も小学校教員の時、生徒を連れて山に弁当持って朝から柴刈りに行きました。

そのお隣りが、水分と言います。水を分ける。五庄屋の力によって、筑後川の水が田の上に上がってきたことは皆さん御承知かと思います。その上がってきた水は、最初は1本だったのが、都合によって水を分けたのでミズワケというんですね。それから、船越という村もございます。筑後川の中に島がありまして、その島を畑として使っておったんですね。この船越校区。船に乗ってクワを持って働きに行って収穫をするということです。これも川に関係があります。そして、中心部が田主丸なんです。これは田主丸の町に川が3本流れておりまして、その川の水を利用して、田主丸だけで13軒の造り酒屋があったんです。すごい。こういうところは他にないですね。昔から雨の多いところで植木の生産が盛んであった。それを買いに來る人たちが多いんですね。それを相手にする。それから飲み屋が多いんですよ。いまだに多いですね。そして、とっても安い。少々飲んでも1350円ですよ。というようなことで、私、福岡から來て、これが1番嬉しかったです。そういうことで、この田主丸のところに第8のゾーンという各称をいただいたこと、これはもうとても嬉しく思っております。

さっき言いました柴刈校区が、川のすぐ横に面した部落ですが、河川敷に公園を作ろうという運動が今おこなっております。町長さんからも「しっかり頑張ってください」という応援体制になっております。よろしく応援をして頂きたいと思っています。



その他、河川改修工事。山部にはたくさん水が流れ込んでおりますが、それを改修工事するんですね。地域の人が三面側溝でやってくれと。それをやったら早くできるんですよ。経費も安いからパッとすぐ飛びついてくるから、これでやってくれと言って、私のところに言ってくるんですね。それは間違いですよ。役場はすぐしてくれる。それは間違ったことです。国も県も今河川工事はできるだけ自然型工法ということでやってきてるんです。今日も、そういうことでやらないかん時期になっておるんだと思っております。明日、部落の集会がありますが私はそこで配る文章の原稿も100枚印刷作り上げております。いかに自然型の工法の河川工事が大事であるかということを理解していただきたいと努力をしているわけでございます。以上です。

#### 【西川】

どうもありがとうございました。

7つの校区が水にゆかりがある名前があるというようなことで、具体的に生活と離せないというようなところから、お話していただいたと思います。

続いて、坂本さんよろしくお願いします。

#### 【坂本】

私の方においでになった方はわかるかと思いますが、集落が狭い谷間に寄り添い、その中の10軒が窯元でございます。平地が少なく、私は、ここは、井の中だと思っているのです。今は違いますが、私が子ども時代は海を見たことがなかったのです。まさに、大海を知らないのであります。さきほど、甘木の川の話がありましたが、私どもの方でも水神様が祟るという言葉が今も使われております。川の水を利用して陶土をつくる訳ですが、今はその康臼が40基ほどに増えました。それでも家族だけでの仕事、2人でロクロをひくその量によろしくであります。今はコンクリートになりまして土砂がたまっていますが、昔は川の水をせきためる堰が、自分で重ね積む石でありまして、それが梅雨時の大水で壊れるわけです

ね。それを何回も繰り返すこともあったのです。だから夏の川は非常に深く子どもの水泳は危険なところがありました。だから水泳が得意な子が多うございました。多種の魚も潜んでいましたが、今はだめであります。

小鹿田窯は遅れた小さな窯場ではありますが、県などからは非常に大切にされました。ここの道路は日田市から北九州にぬける最短の県道であります。窯がある関係もありまして、20年近く前に広くなりました。しかし、狭い道路を広くするために、山を削り、川を移動させねばならなかったのです。そのために、川の様相風情が変わってしまったのです。全く渚もなくなり、魚の棲めるところもなくなりました。これは何とかしなければならぬいいながら、まだ何にもなっておりません。県に相談しましたところ、どうにかしようという答えを頂いたことがありましたが、このような時世となりました。数年前、それでは自分達で何とかしようと再度申し出ますと、川の石を取り出しては駄目、石を入れても駄目と申されました。私たちは、できるだけ川を昔の自然に戻したいのです。川魚も復活させたいのです。少しずつ地元でその準備もしております。川に石を入れてはいけませんが、山からの落石は仕方がないと言われていましたから、私は今、出来るだけ早く落石があることを祈っています。

私のすぐ下流に、河川プールが出来まして10年になります。真夏だけは大変な賑わいがあります。そのプールは年10ヶ月は休んでいるわけですから、今年3月、試しに釣堀を企画しました。新聞などに広告を載せ始めましたところ、お叱りを受けました。プールで入場料をとってはならないと。ボランティアでプールにペンキを塗ったり、監視をしたり、釣堀で儲けることはないのですが、皆さんに何かいい案がございましたら教えていただきたいと思います。

### 【西川】

ありがとうございました。

水と川との出会いから始まりまして終わりのほうは、住民の川・水との付き合い

いと、行政との付き合いの仕方についてお話をいただけたかと思います。

では、お待たせしました。最後、船津さんお願い致します。

【船津】

筑後川まるごとリバーパークということですが、私のとこの会長、嶋田先生が筑後川を上流から流すだけじゃなくて、下からも文化が上がって来たとうことをよく言うんですね。ひとつは、筑後川一番末端の橋が新田大橋ですかしら。それから、ずっと上がりまして小国の方にもずっと橋はあるんですけども、坊ヶつるの方に観音橋というのが法華院にあります。これが一応一番上の橋じゃないかと。私はその橋をずっと数えたことがあります。と申しますのは、九重の飯田高原に千町無田というところがございまして、そこは、先ほどの話と関連するんですが、筑後地方の方が多いですよ、御存知の様にですね。それともう一つ。筋湯温泉というところがあります。そこに、筋湯観光ホテルというのが筑後の方です。ですから、飯田高原には、以前より筑後の方がたくさんいらっしゃいます。

それと飯田高原の朝日長者物語というのがありますが、この朝日長者の子孫が久留米の太郎原にあり、お寺さんが、朝日寺かなんかというのがこの朝日長者。そういうことで、筑後川を利用して、色んな文化が九重の方と交流をされている。だから、これは筑後川が育んだ一つの文化じゃないかなという風に思っております。

飯田高原より上には山だけしかいないんで、生活している人々がいないわけです。ですから、飯田の人たちは、現在、無農薬・有機農業を目標に取り組んで、色んなことをやって、そういうことで私たちはその下で地域作りをやってまいりました。今、私たちが一番気を使わなくちゃいけないのが、福岡の人、久留米の人が、わざわざ飯田まで、九重まで男池の水を汲みにいらっしゃるんですね。ですから、水の大切さ。じゃ、筑後川の水が飲めるように、以前は、先ほど柳川の方から掘割の話がでましたけども。昔は風呂に真水をひいたり、川からひいたり、

朝、タオルひとつ持って洗い場のところまで行って、げた履きでトコトコと下りて行って、口をゆすいだり顔を洗ったりした。そういうようなことを、川でできれば良いなど。我々が一番気を使わないといけない、先ほどから言いました、農薬の問題、肥料の問題、一番小さいようだけれども、家庭から流れる汚水。これがよくないようです。ですから、私たちの筑後川水系がいつまでも清らかで、いつでも飛び込んで泳げるような、そういう地域作り、川作りをすれば、まるごと立派なリバーパークになるんじゃないかと。そういう中から、魚釣りができたり、それから色々な昔から私たちの祖先が川を慕っていろんな文化をくれたのが、100分の1か、1000分の1でも実現すればいいなというようなことで、私たち、飯田高原デザイン会議というのをつくっております。これが、のちほど最後に紹介しようと思ってるんですけど、氷の祭典だとか、スキー場だとか、野焼きとか、飯田高原マラソンだとか、そういう色んなイベントを次から次にやってきました。ですから、飯田高原、飯田小学校、飯田中学校の子どもたちの児童数も減らないんです。過疎化しないんです。もちろん、不動産業者が来まして、土地を買い占めて5000坪から100坪くらいで、別荘がたくさんできてきました。100坪くらいとか、そのくらいの広さでは、すぐ隣の窓を開けたが良いし、別荘なのか何なのかわからない。そういう別荘がたくさん密集して、結局なくなっていくんですね。ですから、本当に考えた場合、地域が本当に自然を大切にしよう、自分の故郷を守ろうということに本気で取り組んでいけば、少しずつ、昔の豊かさとか、心の豊かな生活が出来るかなんていう風に、今私たちは頑張っております。

### 【西川】

どうもありがとうございました。

最後のご発言で、上流から下流に水を流していく一方で、下流から上流に人がやってくる、または文化が伝わってくるというようなことを、まるごとリバーパーク、まるごと流域全体で考えていかなくはいけないというようなことを、ま

めていただけたかと思います。それは、最初の方の発言でもありましたように、上流だ下流だというようなことを言ってること自体がもう、問題なんだと。流域全体で考えていく必要があるというようなことにつながっていくかと思います。

参加していただいている皆さんの方からも、色んなご意見、または、パネラーの方に質問とかありましたら、発言をしていただけたらと思います。

20分から25分くらい、フロアーの方からご発言いただきまして、そのあと、パネラーの皆さんに最後のご発言をお願いしたいと思います。

では、フロアーの方で、ぜひリバーパークに関して発言したいという方がいらっしゃいましたら、手を挙げていただけますでしょうか。

#### 【財津】

一つだけパネラーの皆さん方におうかがいをしたいなと思っているのはですね、去年の暮れに第16回の佐賀フェスティバルの中で、第1段階の清流宣言、ゆたかきよらか筑後川宣言を宣言いたしました。次に第2段階の、じゃ、具体的にどうするのか？という段階に、今入りつつあるわけです。せっかく良い機会ですので、先ほどから、船津さんの話や西田さんの話の中にいろんな水の話がございましたが、豊かで、水量の確保が出来て、綺麗な水をどういう風にしたら良いのかというか、多くの自治体があり、たくさんの団体があるこの筑後川なんで、せっかくですから、もしよろしければこれからどうする、どういう風にしたら水が綺麗になるのか、ということを、ぜひご意見をいただきたいなという風に思っております。

ちなみに、筑後川宣言をできるだけ早い時期に実行に移したいと思っておりますので、その中でそういったご意見をぜひ参考にさせていただきたいと考えております。

#### 【西川】

どうもありがとうございます。

非常に大きな質問だと思うんですけど、パネラーの方で、どなたかお答えしたいという方、いらっしゃいますでしょうか？

【立花】

後で、『水の会』の方でお話しようと思っていたんですけど、柳川の『水の会』の目的も、水を綺麗にすることです。柳川の掘割はかつて飲料水として利用されていました。これは河川ではございません、掘割でございますので、人工で掘った掘割ですから非常に苦労しているんですけど、少なくとも私が子どもの頃はまだこれを飲んでいました。水を汲んで、隣りではご飯を炊くために米をといで、あるいはお茶碗を洗って、お茶を飲むためにお堀の水を汲み上げ、そういう河川に戻したいというのが『水の会』の目的です。その水を取り戻すためには一体どうすればいいのかという、理念だけでございますけど、まずは、どうして市内の下流でさえ綺麗な水がキープできたのかというと、使った水を掘に戻さなかったということです。排水を、使った水を必ず土の中に戻す。今は使った水を直接ドーンとパイプを通じ彫りに直接ですから、大変汚れてしまった。それは、現代の下水道、あるいは合併浄化槽というものの技術を色々駆使しなきゃならないと思いますが、まずは使った水をそのまま堀に戻さない。土に変わる新しい技術を活用することです。

2番目は掘割の浄化能力を高める。これは先ほども雨どいの話がありましたけど、柳川も名物を川下りしているところが、僕が言ってるのが大型側溝じゃないかと。三面張りとはいいませんけど、大変大きなブロックで積み上げた掘割だと。かつて、それはたいていが土塁でできていて、岸边に柳があり、あるいはコモやヨシが生え、浅いならかな岸边をもった掘割でした。そこに魚が卵を産み付け、鳥が来て、そして人間が集まってくるという循環があったのが、切り立ったカミソリ護岸になってしまって、そこに河川の浄化能力が無くなってしまった。その浄化能力を高める掘割に戻そうという運動をする。それは当然、行政と共にやら

なきゃならないことです。

3 番目は河川の掘割の維持管理をしていくために、毎年堀干しをかかさずやって掃除をしていく、というこの3点。3 番目の堀干しというのはまだやっております。河川の堀の構造そのものも、完全に行政の手にゆだねられておりますので、行政との関係を取り戻すためには、さきほどのお話があったように、国がそうなるのに、何で末端はそうならないんだというものを、我々も訴えていかなければならないんだと思います。

それから、最初に戻りますけど排水の仕方ということで、私たちが使った水を、使う水と捨てる水を区別してしまったというところから川が汚れてしまった。使う水も捨てる水も同じ水。それは循環している。だから、上流も下流もないんだというのが我々の考えでございます。

水を綺麗にするということだけでお話させていただきました。

#### 【西川】

ありがとうございました。

他に発言がありましたら、その場で手を挙げていただけたらと思います。

#### 【フロアー】

甘木の坂井事務局長の下で働いております（笑）内藤と申します。

先ほど坂井さんが申しましたとおり、福岡市ならびに筑後川流域地域の連携が重要ということで、6～7年前から甘木市だけで単独で行政中心に植樹祭というのをしまして、木を植え始めました。それが行政だけでは手いっぱいになってしまいまして、官民協働で取り組むべきだと、木こりの会のメンバーが最初にやりました。市民の手でやろうという事で植樹祭をしたんですが、それが結構手ごたえがあり、2年目からは福岡市の水道局が入ってくれました。一昨年からは、山と都市は上手く結ぼうということでですね、下流の方から来ていただきまして、有明海漁連をはじめ、柳川・大川からも去年来ていただきまして、今年は倍増さ

れました。

色んなことをやるんですけども、自分たちの力では手の届かないところがありますし、筑後川の流域で、一生懸命色んなことをやられていることを知ってますし、僕らもその一員で頑張らなくちゃいけないこともわかっているんですけど、このようなシンポジウムでも福岡市とかですね、大都会や河口の住民など、自分たちだけじゃなくて、流域全体を巻き込んで、もっとう、違う意味で、いい意味で行政が参加するのが大事ななと思っています。

水源を守る、甘木市民の心も少しわかっていただきたいなと思っているところです。

#### 【西川】

ありがとうございました。

『あまぎ木こりの会』の中での活動を通して、流域だけで考えるのではなく、福岡都市圏とかそういう他の地域を巻き込んでいくことの重要性についてお話いただきました。

他に、どなたかいらっしゃいますでしょうか？

#### 【フロアー】

大川から来ました古賀と申します。素晴らしいパネラー6組の方に情報を提供していただきまして、ありがとうございました。私も、筑後川流域連携倶楽部の一員として、川のことに関数年来携わってきているんですけども、先ほど、国土交通省の方から筑後川のキーワードを、行政と住民という一つの提言がなされましたけども、私は、もう1歩進んだですね、我々こうやって大人仲間では勉強会できますけども、子どもの教育の場にこれを利用してはどうかなと。

先ほど甘木の女性の方から色んな提言がありましたけども、私も何回か、学校の方にボランティアとして子どもたちと勉強会をやったことがあるんですけども、やはり子どもたちもですね、環境問題というものをですね知りたがってるわけで



すね。ま、大川の場合はたまたま校長先生が今日も来ていらっしゃるんですけども、非常に熱心なわけです。この筑後川全体でおそらく400ぐらいの小学校があるんじゃないかと。そう考えると、そこに200名か300名ほど子どもたちがいるとしたら、十数万人いると思います。そしたら、子どもたちの中に、やはり筑後川の情報を色んな学習体験とかそういった色んな形で情報を流してあげれば、環境というものに対してもっと開放したい、色んなところに学びにいきたいという欲求に応えることができると思います。そういった中で、やはり学校教育の場のなかでうまく色んな情報を提供したい、体験学習とか、そういうのを実行していけば、もっともっと筑後川の情報を子どもたちは待っていると思います。今後は学校の中にも我々と国土交通省の皆さんもそういった情報を、文部省とかもっとグローバルと言いますか、開いてこの筑後川の環境問題、小学生の時からそういった勉強を提供していく必要があるんじゃないかと思っています。今日は一つそういった意味で、子どもに視点を当てた提言と言うか、そういった活動を我々もやっていくべきじゃないかということで、提言をさせていただきます。

#### 【西川】

どうもありがとうございました。

リバーパーク構想というものの自体が、色んな年齢層の方々が参加できるようなシステムだと思います。今、御提案がありましたように色んなそれぞれのグループが活動の中に取り入れていけたら良いんじゃないかなということも考えさせられております。

#### 【フロアー】

私は、柳川『水の会』に所属している者でございます。したがって、年も少しいってるということと、矢部川の流域で育ったということも関係があると思って、お聞きいただきたいと思います。まずは、筑後地方と疎遠になりかける筑後川について、リバーパーク構想を支援されたことに対する敬意をまず評したい。何

で、筑後川が筑後地方と疎遠かという理由は、川底が低いからなんです。筑後川の名が付いていながら筑後川の水が筑後の人と関係ありません。ほとんど関係ないです。そういうことをお考えいただけたらと思っておりますが、とにかく、偉い先生がおいでなもんですから、日頃考えてること、今日お話を伺いしてお尋ねしたら、どなたか答えていただけるのではないかと考えてるのが3つございます。

1つは、今から360年ぐらい前、西暦でいえば1638年。鎌倉時代から筑後川といわずに千歳川という良い名前を持っておったのに、徳川幕府が幕命で筑後川と言えというようにしたのは何故だろうということが分かりません。

もうひとつは、開発というようなことの結果色んな公共物が筑後川にできました。ま、筑後川と矢部川ができたんですが、そのことによって先ほど鶴さんからのお話がありましたように、従来、筑後川はいかだ流しによりまして、日田の林業と大川の木工業というのが連帯感があつたのに、夜明ダムが昭和27年にできて分断してしまった。また、筑後川の大堰ができて、まだ進行中なので大きなことは言えませんが、有明海の生物との関係はどうなのだろうかというようなことを、年寄り 생각합니다。

そういうことを、リバーパーク構想なるものが完成したあかつきに前例のようなことが起きりゃしないだろうかと。私ども、矢部川の上流に、皆様御存知のように、ダムできました。色々変わりました。説明申し上げますが、まず、上流というか中流の上というところの黒木町に大藤というのがございます。あそこは花が長いということで有名でございまして、私が子どものときの話ですが、長いのは178センチでした。今、3分の1くらいで、50センチ～60センチくらいに短い。それから、下流になるかわかりませんが、船小屋の楠の木の頭が全部枯れ始めました。これは矢部川の水位がダムによって下がったということだろうとわけですが。

それにしても、2階にヒナモロコのおりますけど、立派な水槽に泳いでおりました。私どものガキの時代はヒナモロコをビクに入れて帰るとしたら、年上の子どもの前を通らずに逃げる様にして帰ったような記憶がございます。それはともかくとして、泳ぎの下手な魚というのはいっぱいおります。典型的なものはメダカでしょう。リバーパーク構想が進められるならともかくとして、従来のようなことであればやらん方がいいと思います。船小屋で14～5年前だったという記憶ですが、建設省のほうから何かお喋りをしなさいという中で、建設省は環境を破壊するなら名前を変えなさいという発言をした記憶がございます。以上でございます。

#### 【西川】

ありがとうございます。

色んな質問とかあったんですけど、また発言を希望されている方がいらっしゃいますので、自由に発言をしていただいた後で、それぞれのパネラーが最後のまとめの発言をしていただく時に部分的にお答えいただけたらと思います。

#### 【フロアー】

竹下と申します。筑後川工事事務所で調査課長をしております。本日はそれとNPOの筑後川流域連携倶楽部の会員でもありますので、今日は半分役人、半分市民団体として発言させていただきたいと思います。

さっき、なぜ千歳川が筑後川と名前が変わったのかという質問がありましたので、私の持っている資料がたまたまありましたので、参考までにお話しようと思っています。

資料によりますと、1636年に筑前の国と筑後の国の家老が参列して、この老中から「この川の名称をどうするか」と言う質問に、筑前の国の家老が「あの筑後川は」と口をすべらせたと。おそらく、筑前川と言うべきところを筑後川と間違えたのであろうと。そこで老中は「よし、決まった。今後は筑後川と呼ぶ」とい

うことで、以来、筑後川と呼ばれるようになったと言われていると。という風に、私の手もとの資料はあります。なお、千歳川以外にですね、千歳川と呼ばれた時代の他に、悲惨な洪水の歴史から、一夜川という名前もあったということです。後は、筑間川。筑前と筑後の間だを流れる川ということで筑間川という名前もあったんだそうです。

どなたか、答えてくださいというお話でしたので、でしゃばり心が出てしまっ  
て答えてみました。

あとは、大変、私、感想を一言。今日も私、勉強しに来たつもりで参ったんですけども、リバーパークとかいったもので、どれだけの議論になるのかなと思って来たところ、私の大変な勉強不足でした。連携ですとか、水の大切さ、歴史、それから子ども。そういったものを、皆で守って、楽しんで、目的があって初めてリバーパークという手段があるんだというお話だったのかなと思いました。また、ゆたかきよらか宣言という話もありましたけども、お話を聞いてて、豊かというのは水の豊かさだけじゃなくって、昔の豊かさ、歴史の豊かさという意味だったのかなと。清らかというのも、カッパ建国で水に飛び込むという話がありましたので、こういった意味の清らかなのかなと。あと、先ほど高度成長とかで人間の生活の上で開発していったというところで、今後もそういった方向性だったら、よろしくないんじゃないかというご意見もあったかと思いますけども、こういった、豊かで清らかな川を残しながらやっていくのが前提でリバーパークなんだなというお話だったのかなと、私は勝手に理解しましたけれども、そういったつもりでやっていく必要があるんだなと、勉強になったと感じております。

感想を述べさせていただきました。

## 【西川】

どうもありがとうございます。

**【フロアー】**

リバーパークは非常に結構で、大いに進めて欲しいと思います。

私はいつも思っていることは、河川で一番大事なことは、やっぱり治水と利水なんですよね。もちろん環境も大事なんですけど、その時に、利水はやっぱり使った水を綺麗にすることなんです。その時に、下水処理場とか、そういう施設はこれから無駄なんです。国にも金が無いんですよ、赤字なんですから。それじゃ、各合併浄化槽とか、さっき治水に関して言いましたけど、昔風のかめ壺かな。壺がありましたよね、江戸時代に使ってた。そういうのでも良いんですよ。そういう小さなあれで、綺麗にして返すのが求められているんです。私もそういうダム開発なんかにもかたってきたんですけど、ダムは不用なんですよね。特に言いたいのは、家庭の排水を綺麗にしている、合併浄化槽有り、土壌浄化もありますから、そういう小さな施設をどんどん進めるべきで、農水についていえば、農水でも、農薬がありますよね。そういう非常に不利な面があるわけですから、それを知るのが一番大事な事なんだと今日は思いました。ありがとうございました。

リバーパーク、ぜひ進めていただきたい、お願いしたいと思います。今日はありがとうございました。

**【西川】**

励ましのエールを送っていただきありがとうございます。これからの時代、月曜から金曜は役人として動き、土曜、日曜は一人の市民として生きる。こういう生き方というのが非常に新しいのかなとコーディネーター個人的なコメントをさせていただきますけども。

あと、残り15分ぐらいになってきて申し訳ないですけども、お一方2～3分で最後のご発言をお願いしたいと思います。それぞれ6名の方には、田上さんの後に、これからのリバーパーク構想の実現に向けて、グループとしてどう関わっていくか、また、グループの中のメンバーもそうですし、地域の内外の人たちが

参加していける仕掛け作り。そういうことについてのアイデアを最後にいただけたらと思います。

最初の発言としまして、田上さんに国土交通省の方の事業と言いますか、そういうところの御紹介をお願いします。

【田上】

今日は本当に非常に感動しておりまして、筑後川流域の皆さんも一生懸命の想いの深さに感動しております。

国にお金がないという話もございましたけど、まさに九州の川も昭和28年で来年は28年の大洪水からちょうど50年目を迎えるんですね。来年ですね。それでやっぱり、これから次の新しい川作りといいますか、それを作っていく時期にきてると思います。筑後川でも、来年度4月以降から筑後川の河川整備局が皆さんと一緒に作っていくという取り組みが始まっていくと思いますけども、やはりこの私たちが今、一番力を入れていこうとしておりますのが、持続可能と言いますか、お手元に今日ちょっと資料をお持ちしたんですが、1ページ目に書いてありますけども、最終的には持続可能な流域管理ということに結び付けていきたいと思っています。これに住民の方に参加してくださいとお話しても、なかなか参加してもらえない。やはり楽しい名前をつけないと参加していただけないというのが、なかなか行政として感じている。やはり今、川で活躍できる人たちを作っていこう。そういう人たちを支援していこうというのが、私たちは思っております、子どもたちに川遊びを教えるとか、そういったことで、場合によっては職業化するとかそういったことも必要になって、流域の中で川っていうキーワードで色んな人たちが携わって川に参加しながら、楽しみながら管理していくという流れが、非常に大事じゃないかなと思っております。

この資料を簡単にご説明いたしますと、13年度から始めておりまして、人のつながりを形成していこうということです。左の方に、九州流域連携会議ですが議

長に駄田井先生になっていただいております。九州の河川のこれからの連携補佐をする。人と人とのつながりを大事にしていくために、中心的に活動していただく住民団体の方とまず最初に、我々としても連携を図っていこうということですね、そういう話し合いを始めて、まもなく連携会議で実施にうつすというところまで今きております。その中で、実際に活動して、子どもたちに体験学習をするとか、そういったことを実際におこなって、本当の問題点とか課題とかを生み出しながら方向を模索していきたいという流れをやっているところです。

実際にやっておりますのが、ここにありますようにリバーツーリズムと。それから、筑後川のリバーパーク構想ではございませんけど、九州全体をリバーパーク化しよう。ひとつの場所では川の魅力が語れないところも、20 河川の魅力を組み合わせればもう少し色んなメニューができて、住民の方も楽しみができるのではないかという考えです。リバースクールという、先ほど古賀さんが言いましたように、川の自然体験学習という、子どもたちに流域の拠点を活用していただいて、環境教育とかそういったことを、住民団体、市民、住民の方と一緒に子どもたちに、そういう学習の場を提供しようという動きをしております。3 ページからは14年度にやりました、各流域で実際、住民団体の方がやられた体験学習の事例を載せております。後で見ていただければいいかと思います。それを中心的に九州 20 の川の情報を発信するということで、川の情報室も開設しております。ここで、川の色んな体験情報とか、川のことについて何でも相談室というような形で情報発信しようとしております。これは、どなたでも情報提供できますし、こういう情報を情報室で流していただきたいといえ、情報室に個人的に電話されて、インターネットでやられても情報室が皆さんに代わって九州の全域に情報を流します。これは無料で使えますのでどんどんお使いになって、自分たちの活動についてもこの情報室を使っていただけたらと思います。

それと、この川のみちガイドも情報発信の一環なんですが、書店で今年の夏場、

売りました。住民団体の情報に基づいて作った本です。住民団体が手作りで作られた本ですから、そういったことも今取り組んでおりまして、人と人とのつながりというお話をしましたけども、これから、こういうリバーパーク構想とかをやはり実践されてます。たぶん、相当時間がかかるとは思いますが、大事なものは人材だと思います。人材は、今日のパネラーや会場の方、詳しい方ばかりだと思いますけども、人材の発掘と言いますか、やはりどこも、流域もそれで悩んでおります。なかなか人材を、一緒に手伝ってもらう方がおられないというのが悩みのタネです。それと、お金の問題ですね。そういった問題が、非常にこれから現実的な問題として出てくるかと思いますが、今は九州整備局の人材育成とか発掘をどうしたらいいかと言いますか、色んな仕組み作りを模索してやっていこうと思ってます。これから平成16年までの3カ年ぐらい社会実験的にこういったことをやっていこうと思っておりますのでぜひとも筑後川流域の皆さんでリバーパークが成功する様に頑張ってくださいねと、国土交通省としても最大限の協力を申し上げます。

よろしく願いいたします。

#### 【西川】

ありがとうございました。

色んな中身のことをお話いただきたいんですけど、時間のことがありますんで2分くらいでまとめの発言を最後していただけたらと思っております。

では、お隣の船津さんからよろしく願いいたします。

#### 【船津】

九重の場合、今考えているのはですね、もう何もしない。何もしないのが一番良いんだと。そういうことです。何もしないという事は非常に貴重なことじゃないかと、そういうことを言っております。

今、週2日制になりました学校の中に、憩いの時間、これをよく利用して、子



どもたちに自然の大切さ、ひいては環境教育しています。先祖から受け継いだこの大自然を、今、後世の人に残すためには何もしないが一番いい。こういうことをよく言っておりますので、その方向で、いい加減に開発していく。無責任じゃなく、良い加減に開発していくということです。よろしくお願いします。

### 【坂本】

先ほどいい加減なことで終わりました。谷川に石を入れようということですが、向こう側は山で川は深い。大水が出てもどうということはありません。水速をブレーキするためにも大きな石を入れ、時間はかかっても自然の湧をつくりたいのです。いくらお金もかかりますので1人1万円出費で、石も確保しています。処罰を受けるときは私1人ということもしております。私の地域は蛸祭りも続いていております。養殖をしてまでと私は申しましたが、現在はそれをやめ、川を大事にすることにつとめています。日田市で1番高いといわれる岳滅鬼山は私のすぐ後ろであります。ここの山開き祭りもやります。毎年5月シャクナゲの時期であります。この山名にちなんで、岳滅鬼太鼓というグループも生まれて、10年になります。もう、大変上手であります。私は小鹿田の窯場で焼き物を造っています。コマーシャルになりますが、どうぞ皆様、お越しいただきますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

### 【西川】

ありがとうございます。

西田さんよろしくお願いします。

### 【西田】

『山苞』のものです。『山苞』は山辺にあるわけです。中山間地帯ですね。この地域活性化のためにはどうしたら良いんだろうかということについてお話ししたいと思います。

簡単に言ったら、観光客をおびき寄せることですね。エコツーリズムというの

が言われております。自然環境とか歴史とか、その産業などを観光資源としてお客さんを呼び寄せること。これが非常に大事な事だと思います。お客さんを呼び寄せるための3つの点を申し上げたいと思います。

第1は、外来客は何を求めてくるのかという事を地域住民がしっかりとわきまえる必要があるとおもいます。1番大切なのは、環境自然景観の美しさ。空気や水の美味しさ。もうひとつは、体験の面白さ。柿狩りとか葡ブドウ狩りとか、沢遊びとか、植木を自分の目で選ぶとかですね。蛍を見に来るとか、あるいは文化工房を視察にくるとか、あるいは住民との出会いを楽しみに来るとか、そういうような事を求めて、外来客は来ると思います。

2番目に、住民自身が誇りに思える魅力的な山里作りをしなくちゃならないと思います。若者が逃げていかない。ここでもう生活ができるんだと。あそこなら嫁に行っても良い。ここで暮したい。いわゆる、終の棲家と思われ、移住してくる人がどんどん多くなるような楽しいところにしなくてはならない。それからもうひとつは、高齢化社会で、広い広い柿畑、ブドウ畑を持っておるんですが、だんだん手が足りないために、それをやめていくところがあります。ここでやはり、浮羽町でやっているオーナー制ですね。それが必要ではなかろうかとおもいます。それから、これは10日ばかり前の西日本新聞に顔写真で載っておりました。明治時代の田中正造の言葉ですが、『真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし』と、すごい事を言っております。これはやはり、精神を立て替えて頑張らなくちゃならないと思います。

3つ目は、川はそこに住む人たちが1番大切にしなければならない、公共のタカラモノであると。我々が1番大切にしなければならない公共の宝物である。ただ、地権者だけの川ではないという考え方を徹底しなければならないと思います。沿岸の農地とか森、植物、サワガニ、魚などの動物、それからせせらぎの音、岩の美しさ。こういったものが三面張りにいたしましたら全部なくなります。出て

くるものは危険性です。川は雨期になりましたら、この三面張りだったらもう落ちこんだら、掴まれるところがありません。非常に危険が生まれてきます。そういう事を、一般住民に徹底的に理解をしてもらう事が大事だと思っております。自然型工法というのは、地球温暖化の防止にもなり、また、川の水の浄化にもなり、海の浄化にもつながっていくと。そしてひいては、リバーパークの発展になるんじゃないかと思っております。

### 【坂井】

まず最初に、駄田井先生がご提案のゾーンわけですけど、これ見てたら、やっぱり甘木・朝倉の⑤⑥⑦番は一緒にいいかなと。合併に向けての法定協議会も出来あがりますし、理念や背負ってきた歴史とかが一緒になると思います。それとは別に、水が流域全体の共有財産であるとすれば、このゾーン分けは関係ないと。全部が一緒に、上流から下流域のお魚に至るまで、皆で共有していきましょーうと、そのための経済交流もおこないましょーうと。

昔と比べて、交通網や通信体系が格段の差で発達し、すぐ手に入るという時代ですから、それは不可能ではないと思います。それと、先ほど財津さんの方から、いったいこれからどの様に実行していったら良いのかというご質問があつて、フロアーの方が、子どもたちが教育の場に理念を持っていくのだとおっしゃったのは、私は非常に賛成いたします。というのは、これからはやはり、これまでの価値観とは違った、新しい時代の価値観の創造と確立をここでしていかなければいけない。つまり、価値観の転換が急がれるのではないかと。水ですとか、森林ですとか、生物や穀物全て、私たちの生存のために存在しているのです。むしろそれがあつて、神が私たちの命を地球上に誕生させた。そういうことを、私たちはまず認識するべきです。

ところで、持続可能な開発という言葉はどこからでてきたかというと、ジェンダーの視点で開発の問題を考えることから始まっているのです。女性の視点から

考える環境問題。例えば、お腹の中の胎児がおかしいといち早く気がつくのはやはり女性なんですよ。そこから、何かがおかしい、そこに今までいた魚が消えた、蛙が消えた、おかしい。そこらへんの危機感から、持続が可能な開発というような視点が生まれてきたと思うんです。そのうちに子どもの姿が消える日がくるかもしれない。種が絶えてしまえば終わりですからね。ですから、この会場にいらっしゃる女性の皆さんはぜひ、これからの男性主導型環境開発というものを一緒に考えていっていただきたいと思っております。

話がそれますけども、教育基本法の改正とか言って愛国心の問題とか出てますけど、愛国心というと、狭義の意味で考えると、戦前に戻り、滅私奉公するみたいなものがあるんですけど、もう少し広義に捉えて、やはり国土の資源を皆で守っていく、皆で愛するというような気持ちを、これからの教育には大事なんじゃないかなと、そういう意味で小学校や中学校、高校に国土を守っていくという気持ちを教育の中に取り入れていく。今までのような、経済追従型の入試得点型教育を脱却して、何のために我々は将来を目指して生きてるのかということをきちんとふまえた上で、このリバーパーク構想をやっていけば、おそらく将来、九州府ができた時にここが中心になるんじゃないかと。ね、駄田井先生。(笑) 筑後川流域が九州府の中心になって全てが豊かに揃ってるような。それがグローバルになればすばらしい。

ところで、ここに今日、行政の皆さんもたくさんいらっしゃいますけども、やはりいつもたこつぼの中にこもってて、同じ共通言語の人とばかり話していると、外が見えなくなりますんで、なるべくこういうところに参加して、たこつぼから抜け出して泳いでください。いろんなことが見えてきて、それが政策に反映されてくるのが楽しいですよ。

ちょっと蛇足なんですけど、甘木・朝倉の観光協会さんの方では、今ちょっと注目を浴びている「町の駅構想」というのがあります。普通のお店や、普通のお

宅に「町の駅」という旗を立て、そこで、おトイレ貸してあげたり、地域の説明してあげたりして、いくつかの拠点づくりをし、その点と点を結び線にして、その線と線を結んで面に広げていくのがねらいで、少しずつ脚光を浴びています。あちこちから講演依頼がきているそうです。そういったことが、今後筑後川流域でも広がっていくんじゃないかという予感がいたします。

### 【西川】

ありがとうございます。

今度は立花さん、お願いいたします。

### 【立花】

『水の会』の方の活動ですけど、もうここ『水の会』ができてから十数年間、子どもたち小学生を中心に上下流交流をやっております。子どもたちが矢部村あるいは、星野村に行って植林をする。それから、山の子たちが、有明海に行って潮干狩りをする。そういう行為をずっと続けております。3年くらい前ですか、有明海のノリの色おち問題が発生してから、特に色んな団体が山を見直すという運動が盛んになりました。猟師の山作りだとか、木こりの海作りだとかということで上下流交流が盛んになっております。今月の29日も我々ライオンズクラブで、また植林に行く予定になっております。

それから、もうすでに、エコツーリズムですが、柳川は最初からエコツーリズムなんです。北原白秋の世界と言いますか、カンナがあって、老女がいて、魚族達がいる。そういう物語のソフトの中で、柳川を訪れて下さってます。特に最近、小学校4年生の教科書に、低地の暮らしというのがあります。柳川は有明海が満潮の時は水面下なんですよね。ですから、有明海の潮が引かないと、排水ができないんです。ですから、あれだけの掘割を抱えてるわけです。そういうジメジメしたといいますか、堤防がなかったら、また有明海に戻ってしまうような町ですけど、そういう低地の暮らしというものを見に修学旅行、あるいは観光客が

きています。ですから、これから大変なのが環境教育を誰がしていくのかという問題もあります。

今やってるのは実は船頭さんです。お百姓さん、あるいは漁師さんたちが、船頭していますから有明海の話。柳川の堀のうち、昔は色んな鳥がおったおったり、あるいは色んな魚がおったとよというような話をしながら川下りをします。『水の会』もそうなんですけど、もっとそういうエコツーリズムをたのしんで下さる方々に、話しかける語りべが必要になってくるのですね。そうすると柳川の場合、先ほど言いましたように満潮時は水面下だった。その水をキープする「モタセ」の水の構図があります。色んな水門樋観、例えば梅雨になりますと、上からどんどん水が流れてきた時、まだ排水できない。そんなに上は流してくれるなど言いたくなるくらい、ジャブジャブ水が流れてきます。それでも排水できない間はずっと水をキープしながら。そういう水のモタセの構図というものを、もっともっと我々も勉強会をして、実はこうこうこうなって、排水してるんだと。何時からだったら今日は排水できるんだと。そういうものが説明できるようなものをしていかなきゃならないのかなと思います。それが、先ほどから話し合いますように、まち作りだとかそういうものの中で何でも欲しいというのがよくあるんですけど、何でもじゃなくて、もうアイデンティティーのまち作りをしていかないと、柳川だったらもう掘割のまち作りなんだと。城下町のまち作りなのだと。もうこれではよかつちゃけん、他んとはいらんと。何でもいないというわけにもいかないでしょうけど、単に欲ばったところで、それだけを維持管理できるかという体力も、人力もございませんし、住んでいる人が柳川を十分楽しめるようなまち作りをしていかないと、そこに住んでる人が楽しめない、あるいは面白くもないというところ、絶対に観光客なんてきません。自分たちがそれを自慢にして、誇りにして、遊べる、楽しめる豊かさの仕掛けをもう一度作り上げなきゃならない。柳川に来たら、柳川の人たちは、家の中から魚釣りしよったと。釣ったまんま、

そのまま料理して食いよつたと。おかしなまちやな。そんなまちであって欲しいという願いでまたこれから活動をやっていきたいと思います。

【西川】

ありがとうございました。

最後に鶴さんお願いいたします。

【鶴】

先ほどから話しているように、何もしないのが本当に1番いいですね。何もしないだけじゃなくて、何も求めない。ただ耐えるだけ。キザなことはいいますが、いわゆる、私たちが筑後川フェスティバルを続けていく中で、原点は愛情です。その中で、今日、大川の小学校の校長先生が来てくれていますけども、実験といったら怒られますけども、小学5年生の学習の中には入らしてもらって、筑後川の話聞かせていただいております。そして、子どもたちが、いつも見なれた筑後川じゃなくて、もっと違う筑後川に関心を持っていただけるように、そういう話を時間をさいてもらってやってるんですが、毎年うまくいきまして、日田市の水の森というのをやらせてもらってるんですけども、そこに子どもたちが毎年、都会への社会科見学を、平行して行ってくれています、自分たちで。先生も私も一切強制していません。子どもたちが自主的に社会科見学を水の森のダムの上に行きたいと言ってくれてるんで、続いていると思っています。いわゆる、今ここにいらっしゃるパネラーの皆さんも、聞いていらっしゃる皆さん方もすごく前向きな方で、一生懸命、自分のことを考えていらっしゃると思います。そういった方々が自発的に、退化を求めずに色んなことを柔軟な形で、発案し行動されたらさらに見えてくるんじゃないかと思います。

隣りにいらっしゃるんで、最後にもお願いがあります。我々国土交通省の方がボランティアで活動しておりますけども、やはり、人が動くからには、多少のお金が必要になってきます。色んな資金援助をしていただいておりますけども、なに

も求めずに資金を出していただきたい。成果を求めずに資金を出していただけたら、これだけまじめな方がいらっしゃいますんで、素晴らしい成果は後から絶対ついてくると思いますので、ぜひよろしくお願いします。

この素晴らしい自然は、未来からの預かり物なんです。昔から受け継いできたものだと思っている方もいらっしゃると思いますけども、未来から預かっているものです。だから、必ず未来に返さなきゃなんのんです。ありがとうございました。

### 【西川】

どうもありがとうございました。

鶴さんが最後、まとめてくださいました。今日は、この場で話し合われました、このエネルギー、テンションを、持続的に生かして行ってリバーパーク構想の実現につなげていくことができたらと願っております。コーディネータの不手際で、時間が延びてしまいましたこととお詫び申しまして、2時間半ノンストップでのパネルディスカッションを終わりたいと思います。

2階のほうで、筑後川まるごとリバーパーク展、まだご覧になっていない方はぜひ、お帰りになる前にお立ち寄りください。お願いいたします。

今日は、長時間ありがとうございました。パネラーの皆さん、どうもありがとうございました。

### <閉会宣言> 駄田井 正

また出てきたと思われるかもしれませんが、本日はどうも長時間ありがとうございました。

最後に挨拶で申し上げることもございますが、「環境と経済の活性化」、これは両立できるものだと思っております。例えば、柳川の堀割りの水がきれいになってもう一度飲めるようになれば、先ほど述べましたように、多くの人が関わりた



いと考えてるのではないでしょうか。

最後は非常に哲学的な論争になりまして、何も求めないということでありましたが、私は、この筑後川まるごとリバーパークで大金持ちになろうと思っていますので、皆さんご協力のほど、よろしくお願いします。

今日はありがとうございました。

●お問い合わせ NPO法人「筑後川流域環境倶楽部」 〒830-0011

2003年3月15日「筑後川まるごとリバーパーク」シンポジウム資料 ①

# 「筑後川まるごとリバーパーク」

駄田井 正（久留米大学教授、NPO法人「筑後川流域連携倶楽部」理事長）

## 趣 旨

豊かで持続可能な地域づくり  
環境と経済の両立  
地域文化を生かす

歴史的に長い年月をかけて培われてきた地域文化には持続的な地域づくりの原理が潜んでいる。それを最大限に生かす。

ツーリズム（本来の意味での観光＜クニの光を観る＞）は、環境と経済を両立させる要素を持ち、かつ文化・歴史がそのことに大きくかかわる。

河川の多目的活用では、ツーリズムへの活用は一つの大きな軸である。

筑後川流域圏では、筑後川そのものを含めて多くの観光資源がある。しかし、個別でバラバラな開発では、その資源が充分生かされないばかりか、浪費され破壊されかねない。

流域全体を統一的に視野に入れたビジョンが必要である。

## 概 要

筑後川流域全体を川と水を主題としたテーマパークとして捉える

流域全体がまとまりのない、また画一的な開発にならないように、流域全体をゾーン分けし、各ゾーンの特色を明示して、それを最大限に生かせる地域づくりをする。

○景観、自然資源（山、川、温泉など）、歴史、衣食住に関連した生活文化、風習（祭り、行事など）が特色付ける要素になる。これらの地域特性を生かした豊かな地域づくりがそれぞれのゾーンの魅力になる。

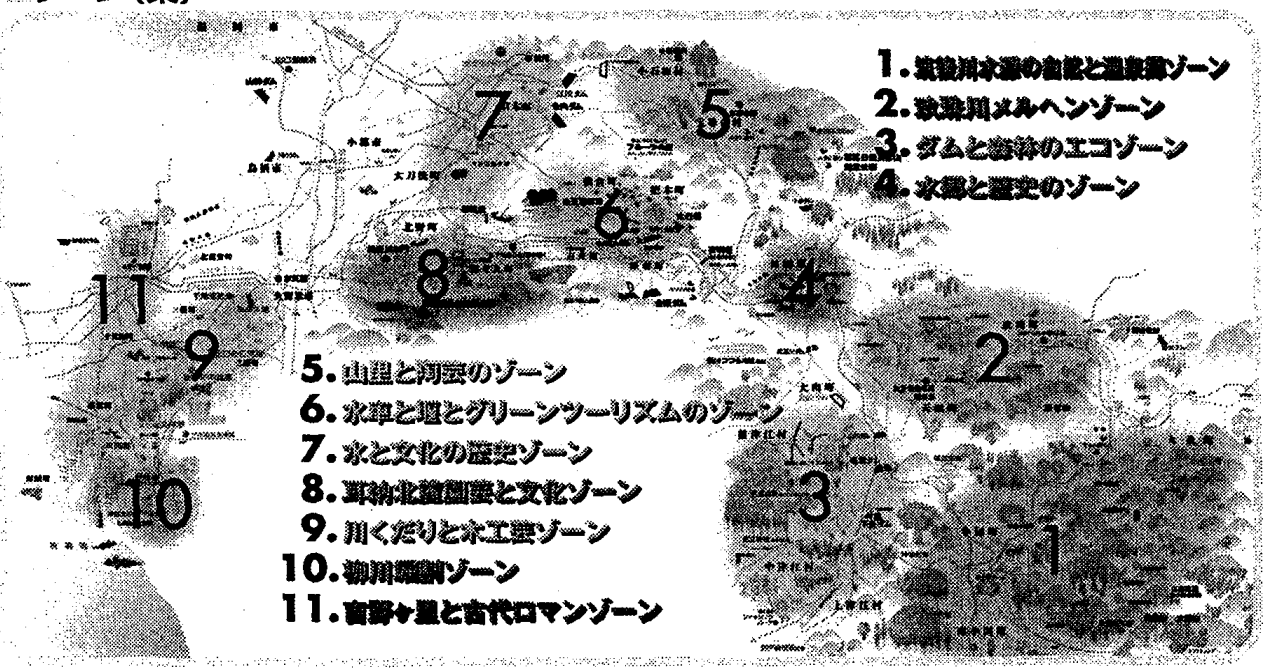
○各ゾーンを、特色ある交通手段で連携させる。例えば、船・自転車道・歩道・馬道・鉄道・共用自動車・飛行船・バスなどで、そして、ゾーン内とゾーン間の移動を連携させることで、様々なツアーコースが設定できる。その多様なツアーコースが、流域圏へと何度も人の足を運ばせる（リピーターの確保）。

## ゾーンの特色づけと固有価値

○自然環境、景観、歴史、生活文化、風習、芸能、地場産業、交通機関／川と人とのかかわり、それに関するハードとソフト

○過剰な開発を阻止し持続可能性を保持させ、かつ新たな地域文化を創生する／豊かさの実感とアイデンティティの元

■ゾーン（案）以下はまったくの私案であって、皆様のご意見・ご批判を乞いたい。



# 「九重の自然を守る会」

理事長 嶋田 裕雄

## ●地域で紹介したい自然・歴史・文化・工業・産業など

- ・九重地域一帯(草原、林、温泉)の動、植物(鳥、昆虫を含む)。
- ・九重の歴史(農、工、商業と宗教、観光)。
- ・九重一帯の文学散策(民話、伝承を含む)。

## ●紹介・解説できる人・団体(ボランティア学習会)

会員数/200人(男130人、女70人)

## ●利用・交流できる施設

交流拠点/長寿原ビジターセンター  
(環境省、TEL.09737-9-2154)

## ●お問い合わせ先

事務局/小山正紀  
〒879-4911 大分県九重町大字田野1712-275  
TEL.FAX.09737-9-2413

昭和30年、ふるさと九重の学識を始めたグループが、やがてその成果を顕著して見たところ大好群で、それに力を得て「飯田高原ガイドクラブ」を結成。貸切バス、登山等の案内に引張りだこであった。やがて九重の登山客も増加してくると山が荒れられ始め、昭和36年、このクラブを核にして、「九重の自然を守る会」は生まれた。今年で、発足40年を迎え、会員は約300名である。

具体的には、植樹・盗掘防止・運搬対策の登山道補修・山小屋修理・指導標整備・機関誌・会報発行・少年クラブ育成・山の清掃等を行っている。又、昨年度だけでも「自然観察会」を83回実施し、2,336人の参加があった。筑後川の4源流である九重連山、飯田高原の雄大な自然。発足以来40年を迎えた「九重の自然を守る会」は、「長寿原ビジターセンター」を拠点に、「九重の自然」の保全、整備、自然観察等に日々取り組んでいる。

2001年

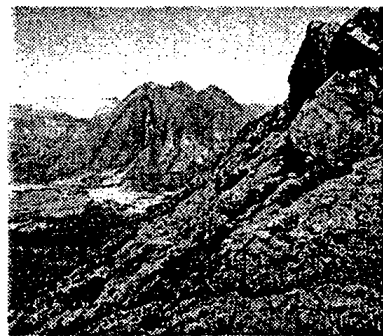


北原白秋や与謝野晶子が、その広さを誇った九重の大自然。四季折々に美しく装う飯田高原は、ノーベル賞作家川端康成の名作「続千鶴」を生んだ。

筑後川の源流域、久住飯田高原から阿蘇外輪山に至る雄大な自然と原生林は、水を育み人々に自然の豊かな恵みを与え続けてきた。又、津江山系の御前新道岳にある全国屈指のシオジ林を含む原生林は、筑後川源流域で最大の規模のものである。



九重連山は、九州本土最高峰の中岳、大船山、久住山をはじめとする1700メートル級のトイデ火山群によって形成されている。地質年代の若い火山で、一部を除き深い森林は発達していない。山頂部には火山の影響や冬季の季節風のためミヤマキリシマ等の低木林が見られ、山麓は野火や伐採などによってミズナラ林が広がっている。山麓は本来ブナ林の発達する高度であるが、黒岳等に一部見られる他はコナラ林やミズナラ林の中にわずかに点在する程度である。



久住、飯田高原は、毎年行われる野焼きによって維持されているススキ草原であり、小さな池沼、湿地が点在し湿地植物など貴重な種を多く保存している。本来は放牧、採草地でカシワ林、クヌギ林が一部に見られるが、開発が急速で規模も大きい為、貴重種で絶滅の恐れのあるものが多い。

又、黒岳山麓や九酔溪、鳴子川渓谷や野上川の渓谷部にはオヒョウ林、トチノキ林、ケヤキ林など谷型の森林が一部に発達している。大船山のミヤマキリシマ群落と九重山のコケモモ群落は、国の天然記念物に指定されている。(佐藤三千代「九重の植物」参照)



## 牛歩遅々40年の歩み更に

40年は、長かったようであり、短かったようでもあります。何しろ、会発足の年に生まれた赤ん坊が40歳の壮年になっているのですから…。

この長くて短かった40年の間に、いろいろありました。いろいろやりました。ゴミを拾い、木を植え、草の種子を播き、虫を退治し、登山道を補修し、道標を立て、ケルンを築き、避難救助に出向き、川端文学碑・与謝野夫妻歌碑を建て、高田力蔵画文集をまとめ、高田・川端両先生の記念展を催し、一人一石運動を始め、防火線を切り、野を焼き、自然観察会を企画実施しています。

まことに「何でも屋」。でも、決して、無節操に「何でも屋」であることを頑なに守ってきた心算ではない。九重に関わる「何でも屋」を続けるには、余程頑固な信念と深く広い「いい加減さ」が不可欠です。そしてその根底には、理屈ではない、豊かで温かな感性から湧き出た、九重に対する恋心にも似た憧れ、「九重が好き」の恋心がマグマの如く燃えていて初めて可能なのです。これから又、この恋心を燃え立たせて、雑多な事業を、余り気負わず、スマートでもなくこなしてゆく九重の「何でも屋」で徹したい、と、ひそかに強く思っています。

九重の自然を守る会 理事長 嶋田裕雄 (2001年12月 季刊「筑後川」より)



## <年間活動>

- 自然観察会、探鳥会(毎週日、祭日/夏休みは土、日/年間90日)
  - 清掃登山、登山道や山小屋の修理
  - 植樹、樹名板、指導標の設置、植物定点観察、その他
- <申し込みに応じて、随時に自然観察を実施している。>



2003年3月15日「筑後川まるごとリバーパーク」シンポジウム資料 ③

へくそかすら

# 「小鹿田焼窯元/同人誌屁糞箋」代表 坂本 茂木

●地区で紹介したい自然・歴史・文化・工業・産業など

●小鹿田焼窯元、小野川源流の風土と自然

●紹介・解説できる人・団体（ボランティア・学生等）

●同人約10名

●利用・交流できる施設

●交流拠点／「小鹿田焼資料館」・  
「山のそば茶屋（食堂）」

●お問い合わせ先

日田市源栄町皿山 TEL.0973-29-2404

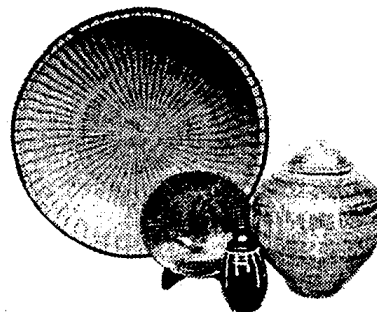
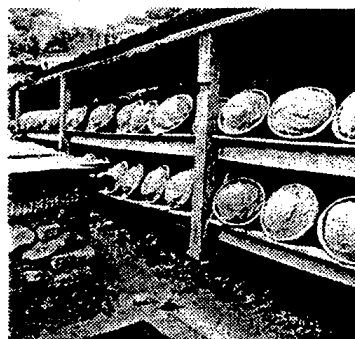
日田盆地の中心部から北へ十六キロ、江戸時代中期に、筑前の小石原窯から分かれて来たという小鹿田焼の皿山がある。私はここで、はからずも窯元を経ることとなって三十年、ほぼそと焼物を造る仕事にいそいでいる。

小さい鹿の田と書いて、不思議にもおんたと呼ぶが、実は小鹿田という集落は、峠を越えて二キロ離れた福岡県との県境にある。そして、皿山という呼び名は、九州の南部地方を除いた、大方の陶器を造る窯場の地名なのである。例えば有田の皿山、上野の皿山、西陣の皿山、小石原の皿山などある。小鹿田焼がここに開窯した当時、ここは小鹿田集落の領分であった。だから小鹿田の皿山である。近年民芸ブームの起る前は、皿山皿山、皿山焼きで通用した。それが小鹿田小鹿田、小鹿田焼きと呼ばれるよう

に変わった。私たちも、小鹿田と皿山の使い分けに無神経となったが、小鹿田というものの集落は、気の毒なほど静かに、山の向こう側にあるのを忘れられている。

小鹿田焼きは朝鮮伝来の技法を受け継ぐ窯場だが、陶土を砕く唐臼も朝鮮伝来のもので、今はここ小鹿田窯独特の風物詩となっている。決して見せ物ではないのだ。そしてこの唐臼こそが民窯小鹿田焼きの要なのである。工人が働くことを怠ればこの唐臼が急き立てるし、唐臼をおろそかにすれば機械がはいって来る。また唐臼が創り出す陶土量が、家族で働く手仕事にバランスして、この体型を崩さなかった故に、小鹿田窯の伝統は守られて来たのだといっている。

もう少し唐臼のことを述べさせてもらおう。川の水を充分に利用したシーソー方式の粉砕機が唐臼で陶土を砕く作業をしている。この窯場にそれが四十丁ほどあって、「ギギョーッ、ゴットン」と昼夜を問わず鈍牛のリズムをかなでている。このリズムが小鹿田のすべてを物語っているといっている。山から掘り出した原土をうたせること二週間、その粉末を水こし自然乾燥して、轆轤に乗せられるまで約一カ月。このスロースピードが、轆轤を精一杯まわす工人の仕事に見合っていて、それ以上の量産は出来ないのである。伝統を守る、多量生産をしないといえ、いかにもしっかりした人のことばだが、実は、自然の掟に私たちの方が守られているのである。私たちは、自然や諸々の恩恵を被って仕事をしているにすぎない。民芸陶器に作者名を入れないのは、この精神であることを分かって頂きたい。



## リーチさんとの出会い

バーナード・リーチさんはこの唐臼が大変気に入って、いつも見つめている姿が多く、沢山の写生もされていた。それは昭和29年の4月で私が17歳、中学校を出たままの気のすずまぬ焼物の修業に努めている時であった。そこへリーチさんの来訪は、私にとって大きな変革をもたらしたのである。

当時はまだ小鹿田窯への道路も狭く、村外の人の出入りもめったにない集村であった。それがリーチさん来山の日、報道関係などの車もあって、初めて乗用車タクシーなどがのりいれた日であった。そして一躍小鹿田窯の名が世に出た。さらに幸いは連鎖して、日本経済の成長、民芸運動の盛衰もあって、全国的民芸ブームが到来するのである。



## 名文 '日田行'

「小鹿田焼が有名になったのは、バーナード・リーチさんが来てからですね」とよく聞かれる。それはそのとおりなのだが、柳宗悦先生が小鹿田の皿山を訪ねて来られたのは、昭和二年のことであった。

柳先生は「小鹿田窯への懸念」という稿を雑誌「民芸」に残して、昭和36年に亡くなられた。この窯の毒される幾つかの条件を指摘し、そして正しい理解者の協力を呼びかけられて。

小鹿田窯の共同体が、量産に走らなかったのは賢明であった。しかし質についてはどうであろうか。民窯の仕事がいかに他力道とはいえ、工人としてのプライド、柳先生のいう物とは何かを忘れてはならないと思うのである。ただ祖先の積み重ねてこられた遺産を食いつぶすのみでは、あまりにも虚しいものではないか。

# 「山苞の会」会長 西田 豊

●地域で紹介したい自然・歴史・文化・工業・産業など

・耳納山麓の自然環境保全・地域文化振興

●紹介・解説できる人・団体(ボランティア学芸員)

会員/約60名

●利用・交流できる施設

游心館(TEL. 09437-2-2397/事務局長倉富宅)

●お問い合わせ先

・筑水庵(TEL&FAX.09437-23807/会長宅)

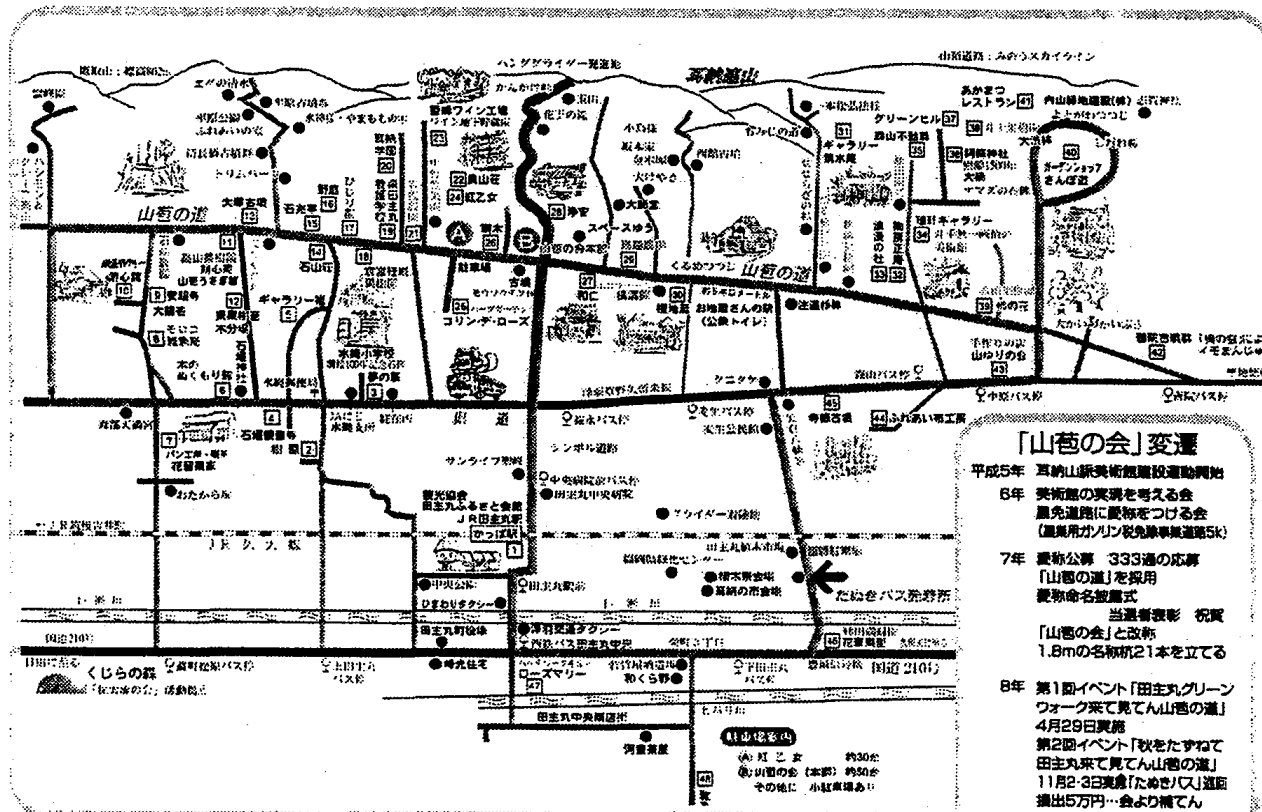
## 主な活動内容・今後の展望

この会では、10の事業を10年かけて完了しようという計画を、会員一丸となって取り組んでいます。「案内地図版及び道しるべ」「ガイドブックの作成」「花運動」「休憩所」「ガイドの登録」「文化行事計画」「文化施設」「グリーンツーリズム」。

以上が主な事業計画ですが、中には一部完了したものもあり、今後行政と連携のもと早期実現できるよう活動しています。

## 美しく 優しく 心ふれあう やすらぎの里

田主丸町は、稲木・苗木とフルーツ観光地・ぶどうの産地で農業が主産業の町です。山苞の会はこういった果樹・稲木・苗木生産農家と地域に住む町の芸術家たちが、郷土の自然環境保全や文化振興に取り組んでいるグループです。苞とは、葉で作った入れ物のことで、この自然の一つひとつの想いを伝えたい、山里からの贈り物という意味で付けました。



## 「山苞の会」変遷

平成5年 耳納山麓美術館建設運動開始

6年 美術館の完成を記念する会

最先端路に愛称をつける会

(道幅用ガラン税免除事業推進5%)

7年 愛称公募 333通の応募

「山苞の道」を採用

愛称命名披露式

当選者表彰 祝賀

「山苞の会」と改称

1.8mの名刺21本を立てる

8年 第1回イベント「田主丸グリーン

ワーク来て見て山苞の道」

4月29日実施

第2回イベント「秋をたずねて

田主丸来て見て山苞の道」

11月2-3日実施「たけのこ」道

推出5万円・会より補てん

9年 国土庁主催「第12回山村アメ

ニティコンクール」

特別優秀賞受賞(2位)

(1位:岩手県産物「山は秋人」)

第3回イベント 秋に因定

11月2-3日

10年 「山苞の道」を久留米市田

にて4月28日~5月3日まで

6日間実施 好評を博する

第4回イベント 11月2-3日

11年 第5回イベント 11月2-3日

会主催の店舗を中止して出店希

望者を募り申込みの方法をとる

12年 第6回イベント

11月2(木)・3日(金)

13年 第7回イベント

11月2(金)・3日(土)

14年 第8回イベント 11月2(土)

・3日(日) 耳納の市と同日



耳納山麓から幾筋もの谷根が北へ伸びる。その谷根に、昔の人は川筋を辿って灌漑用水路としたのだが、今でも延寿寺川を始め、山苞谷川、大谷川、千代久川それに東端の深泊川が、大化の衆星制の遺構を偲ばせてくれる。これらの川源に植えられた植は、三百年この地方の特産米ろうを生産、江戸中期以降昭和初期に至る金融活動を支えた吉井組の資金を生み吉井町の白壁土蔵を運搬する重厚なたずまいを形成することになる。

有数の「フルーツの里」である。富有柿、巨峰ぶどう、みかん等、8月から10月末頃まで周囲は甘いフルーツの香りがたどい多くの人々が訪れる。又田主丸一帯は300年の伝統を持つ日本一の稲木の里。



2003年3月15日「筑後川まるごとリバーパーク」シンポジウム資料 ⑥

# 「あまぎ木こりの会」

事務局 坂井 圭子

●地域で紹介したい自然・歴史・文化・工業・産業など

・甘木水源の森づくり／佐田川・小石原川と秋月の自然と国土

●紹介・解説できる人・団体（ボランティア等含む）

・20名（男性／15名・女性／5名）

●利用・交流できる施設

・交流拠点／「甘木水の文化村」・「共豊の里」

●お問い合わせ先

事務局／坂井圭子

〒838-0068 甘木市大字甘木870-4

TEL.0946-23-2970

## 結成目的

1997年1月に市長に答申した「あまぎ国際きこりの森構想」の実現をめざして、市民団体としてバックアップするために1998年4月1日に発足。

## 活動内容

○甘木の森林保護育成のための提言

○地域の環境及び植樹などの事業参加（平成9年3月「やまもりフェスタあまぎ」で水と緑の植樹祭を開催。寺内ダム・甘木市黒川の米ノ山林道沿いに、緑の応援団と市民ボランティア300名によるクヌギ・杉の植樹を行った。その後、毎年開催。）

○森林従事者の抱える諸問題の解決に向けての研究と提言。

○甘木から世界へ緑の発信。（1997年9月 世界的な環境問題解決のため、JICAのカウンターパートプロジェクトに参加。甘木・朝倉で海外の植林技術者を育成する研修を行った。）



## 水と森の恵み体験 甘木市「やまもりフェスタ」

福岡都市圏の水がめでもある、甘木市の寺内ダム周辺で2001年3月11日、水と森の恵みを感じる「やまもりフェスタ2001」体験しよう 森の汗・森の幸（甘木市・同市森林組合・福岡市主催）が開かれた。福岡市など都市部の家族連れらが地元住民と一緒に、水をはぐくむ森をつくろうと、植樹や伐採を行った。今回のフェスタでは、初めて福岡市民らが伐採作業に挑戦。スギ林で高さ2メートル付近までの枝をノコギリで切り落とした。

また、山の幸を味わう「森のレストラン」のなべ、シイタケの打ち体験など、自然を生かした料理やイベントも好評だった。

## 甘木の美しい水が生んだ味 淡水のり

江戸時代の宝暦13年頃に甘木市屋永で発見された淡水のり。藍藻の一種で学名はスイゼンジノリと呼ばれており、主に湧き水を水源とする川の中に自生、生長すると川底から自然に離れて水中に漂う。甘木市の屋永を流れる黄金川にしか自生せず、大量に採取されるのは、全国を究めても甘木市だけ。



## 弥生時代の暮らしを体験 平塚川添遺跡公園

弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての大規模な低地性の多重環壕集落遺跡。集落を取り囲むように幾重もの環壕が巡っている。防御施設と思われる橋列や物見だい、環壕にかかった橋の跡等も発見されており、平成6年には国史跡に指定された。この遺跡公園では、当時住んでいた人々の生活風景を再現し、ドングリのなるクヌギやカシ類などを植え、また渾の中にはメダカを放流している。



## 支流域の豊かな自然と文化

支流域には水たまりが美しい、奇岩の里を流れる宝珠山川、英彦山への修験者によって植えられた樹齢500年に達する行者杉の群がそびえ、50以上の集落が今も伝統を受け継いでいる「小石原焼の里」の小石原川と大肥川、秋月氏、黒田氏と続いた鎌倉時代からの城下町「小京都・秋月」を流れる野鳥川等、支流域の豊かな自然と文化の風景が今も残っている。

## 小石原焼

天和2年（1682）、黒田藩主が、小石原に肥前伊万里の陶工を招き、大甕屋の磁器を伝え、この頃すでにこの地にあった高取焼と交流することにより、小石原焼は形成されていきました。飛びカンナ、はけ目、化粧掛け、襷掛、打掛け、流し掛けなど独特の技法をみ出した小石原焼は、その素朴な温かみが、生活の器として人々に親しまれ多くの人に愛用されています。



## 九州の小京都・秋月

甘木市の中で、年間を通じて最も多くの観光客が訪れるのが、「秋月」です。秋月は、「九州の小京都」「筑前の小京都」とも称され、豊後古処山の麓にひっそりとたたずむ情緒豊かな城下町です。秋月の歴史は、鎌倉時代（1203年）原田種盛が幕府より「秋月庄」を賜ったことから始まります。秋月氏（庄）は、戦国の時代背景より、周囲を山々に囲まれた秋月の地形を利用し、古処山城を中心とした実戦向きの配置を整え、栄華を極めました。豊臣秀吉の九州進攻に敗れるまで、約400年間統治しました。（秋月氏は、宮崎県・高鍋町に移封される）時は経ち、江戸時代にはいとと秋月の第二隆盛期にはいります。いわゆる秋月黒田藩の時代で、福岡黒田藩の分藩として、長政公の三男・長興を初代藩主としてスタートしました。現在の城下町の風情は、この時期に形成されたものが残っています。「小京都」と称するだけあって、城下町の概要は地形から産業に至るまで、町並み・味・技などに伝承されています。

## <小京都「秋月」と古処山の原生林>

小石原川の上流、野鳥川に沿う城下町秋月、13世紀以来の文化が山里に散在する。源流の古処山には貴重なツグの原生林がある。



# 「大川活性化協議会」/「かっぱ連合」 会長 鶴 秀穂

●地域で紹介したい自然・歴史・文化・工業・産業など

・大川市と筑後川下流域の風土、文化、産業

●紹介・解説できる人・団体(ボランティア学会等)

・「大川活性化協議会」/350名

・「かっぱ連合」(筑後川フェスティバル歴代主催者のネットワーク)

●利用・交流できる施設

・大川市の文化センター他の交流施設

●お問い合わせ先

・鶴 秀穂 TEL.0944-88-1556(大川市)

1998年、活性化協議会は2巡目となる第12回筑後川フェスティバルを佐賀県唐津町、川副町と共同で開催、テーマは「ありがとう筑後川・みつめようエコロジー・広げよう流域の輪」。又日田市「水の森」植林活動や「筑後川流域連携倶楽部」等の流域交流にも積極的に参加し、活動を広げている。

1987年大川の地で、筑後川フェスティバルが産声を上げ、小国、日田と続き、第四回甘木朝倉大会が終り反省会と次回への引継のため、大川、小国、日田、甘木、朝倉、久留米の各地区の代表が原鶴に集い、ここまで、筑後川フェスティバルを続けられた、感謝と、これからも続けるための意義について、激論が交わされた。

激論終盤に、提案があり、今後は、フェスティバル開催地の皆さんにのみ頼るのではなく、今までの開催地の代表を中心に、流域連携の推進とフェスティバルの支援を行い、今後の開催地代表に加わって頂き、その輪を広げ、筑後川に係わる住民の活力を取り戻す為の、組織の結成が決議されました。

正式名称を、「筑後川流域住民連合会議(通称かっぱ連合)」と名付けられ、具体的な行動計画を検討中に、台風十七・十九号により筑後川流域は、大打撃を受けました。九州大学農学部の先生や、九州電力、建設省の支援を受け、流域の皆さんと共に、二次災害予防と、森林復興の署名運動、関係省庁への陳情、関係各県への働きかけなど、森林復興の為の運動が主体となり大変な日々でした。その間のフェスティバル支援が手薄になっておりましたが、そこは住民パワーでありまして、森林復興とフェスティバルをなんとかドッキングして頂いておりました。

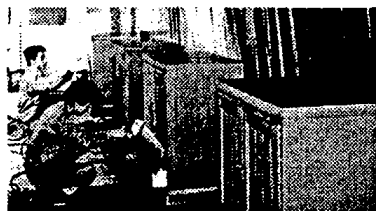
第10回久留米大会では、森林復興支援とフェスティバルが一体となり、佐賀、福岡、大分、熊本の4県知事も加わって、八億強の森林復興基金の創設が決定しました。さらには筑後川を幹として、環境問題だけでなく経済交流も含めた、地域活力づくりとしてのクラスター構想が提案されるなど、各地に個性豊かな地域づくりグループが誕生しました。

そんな中、これまでの単独地域開催から、広域連携による開催への転換が課題となり、行政枠、地域感情など難関山積みですが、第十二回大会より挑戦し続けて頂いております。

かっぱ連合としては、あまり表面には出てはきませんが、筑後川フェスティバルの継続と、流域連携の拡大、さらには流域の皆さんの元気な笑顔の為に、ひそかな活動を行っております。いつ何時、皆さまの地域にお邪魔するか分かりませんが、筑後川への「感謝」と「未来」へ繋ぐ、連携のお願いへ伺いますので、その節はお願いいたします。

「かっぱ連合」会長

前「大川活性化協議会」会長 大川市 鶴 秀穂



家具工場での製造風景



全国でも珍しい昇降式可動橋「筑後川昇降橋」



JR佐賀線唐津駅に整備が進む昇降橋展望公園

1	1987年5月	福岡県大川市/「豊かな地域と明るい地域環境の創造に向けて」
2	1988年8月	熊本県小国町/「流域住民の連帯強化と地域づくり」
3	1989年8月	大分県日田市/「筑後川と共により地域を結び、新たな出発を」
4	1990年8月	福岡県甘木・朝倉地区「4市7町村の地域連合」
5	1991年7・8月	福岡県久留米市/「筑後川への感謝、自然と人間の共生」
6	1992年8月	佐賀県唐津町/「筑後川を母として流域はひとつ」
7	1993年4月	大分県日田市・玖珠町/「よみがえれ森林、守ろう筑後川」
8	1994年6月	福岡県柳川市/「筑後川最下流からの視点、有明海と食文化」
9	1995年8月	福岡県浮羽郡3町/「水の命・ありがとう」
10	1996年8月	福岡県久留米市/「流域は語る」
11	1997年8月	福岡市/「水への感謝…蛇口の向こうに何が見えますか」
12	1998年7・8月	福岡県大川市・佐賀県唐津町・川副町「ありがとう筑後川・みつめようエコロジー・広げよう流域の輪」
13	1999年8月	大分県大山町/「森林・川は豊かな文化のパロメーター」
14	2000年8～10月	福岡県小都市・大刀洗町・北野町/「命の水・筑後川に感謝～水がたつなく流域連携のミレニアム」
15	2001年7月	福岡県城島町
16	2002年11月	佐賀市郡7市町村/「すばらしい佐賀の水環境 過去・現在・未来」

筑後川  
フェスティバル  
のあゆみ



2003年3月15日「筑後川まるごとリバーパーク」シンポジウム資料 ⑦

## 柳川「水の会」 会長 立花 民雄

●地域で紹介したい自然・歴史・文化・産業・資源など

・上流矢部川での植林、自然型体験、下流有明での潮干狩り etc.

●紹介・解説できる人・団体(ボランティア等含む)

・会員約130名

●利用・交流できる施設

・柳川市「水の資料館」  
(有明海の自然、沖の端漁港 etc.)

●お問い合わせ先

・水の会事務局 清成 泰蔵 TEL:0944-73-2918

### はじめに

水の会は県の南部、筑後川と矢部川が有明海に注ぐ間のまち、柳川市で生まれました。

柳川地方は、今は「水郷柳川」と呼ばれる水郷地帯ですが、もとは水に恵まれない大変な低湿地帯でした。先人たちはこの地を掘って拓きましたが、この平野をつくった筑後川は有明海の潮がずうっと上流まで遡るため、平野の用水を賄うことができませんでした。そこで、柳川地方では平野の南部を流れる小さな矢部川に依存せざるを得ず、水の確保には大変な苦心と努力が払われてきました。この矢部川をめぐって藩政時代には久留米、柳川の両藩が世界に例をみない熾烈な水争いを百数十年にわたって延々と繰り返したほどで、この川は古くから極端まで利水開発が進められてきました。

このように水に恵まれていなかったが故に、時には豊れる水をなだめ、少ない水を有効に使う知恵も高度に累積されていました。ところが残念ながら、ご多分に洩れず川や堤の汚濁荒廃が進みました。

### 水の会発足

そこで柳川市では1978年から住民参加で再生(河川浄化事業)に取り組みました。その中で大勢の人たちと交流が生まれました。その一つが「八女・山門研究会」です。「矢部川流域にはすごい文化がある。勉強してみよう。」ほんの少し前までは流域には独自の文化が花開いていたんだ。地域の真の豊かさをめざすには、東京や福岡ばかりに目を向けるのではなく、地域の歴史や良さをもっと良く知らなければ…、流域独自の文化に学ぼう！と流域市町村の有志、郷土史家など十数名で80年から「八女・山門研究会」を始めました。

この会をおとして、山村では材価の低落と労働力の不足、とりわけ若年層が少なく森林・山村ともども崩壊寸前であることを知り、さらに、山村の人たちがこのきびしい状況の中で身を削っている姿に接して、山村づくりに参加していくことを決意したのです。

このような中で水の会が発足しました。このきっかけも先の研究会同様、河川浄化事業に遇ります。この事業の成果を受けて、89年5月、第5回水郷水都全国会議が柳川市で開催されました。水郷ならではの多彩な催し、会議の内容の豊かさもさることながら、1200人を超える参加、とりわけ女性の参加が500人を超え、これまでにない多くの参加を得て画期的な成功を収めました。現地では、この成果を踏まえて活動を継続していくということとして、91年8月1日「水の日」を記念して主に福岡・佐賀県内の人たちが集まり、「水の会」を発足させました。

柳川市にはさき述べてのように河川浄化事業で住民と行政の協働が実って以来、水環境の保全と再生に取り組んでいる大勢の方がたが訪れる交流があります。この交流を通し地域に根差した水の文化と、この水郷の先人たちの水との付き合いの知恵に学んで、失われつつある水文化の再構築、継承発展と水環境の保全再生に役立てようと「水の会」を結成したわけです。会員は北海道から鹿児島まで約130名。他団体・個人との交流、毎月の例会のほか、講演会、シンポジウムの開催、見学会、会報の発行などを行っています。水環境の浄化を考えるネットワークを広げていく、いわば水文化の情報発信基地です。



### 山村に感謝し交流をいつまでも

活動の重要な柱の一つに、矢部川源流の矢部村との交流を据えています。「有明海の幸も山からの贈り物」と心にきざみ、矢部村の小学生たちを招いて、下流域の小学生たちとの交流。また、矢部村の案内で、大杉自然塾、森の教室、源流体験キャンプ等を行っています。

上・下流域の子どもたちは、矢部川源流を守ることは、下流の人たちの生活を守ることにつながることを身をもって認識したことが、作文・絵日記等からうかがえ意を強くしています。

95年からは91年の台風19号で大きな被害を受けた矢部川源流の山へのボランティア植林事業にも参加しています。96年9月には有明海に注ぐ5県の仲間と大型フェリーを賃し切って海上から源流の山々を眺めて、海・山・川を語り合い、水系の浄化と保全の道を語り合いました。97年5月17・18日には柳川市で第5回九州水環境交流会を九州の仲間と開催しました。続けて5月25日に有明海の潮干狩り「矢部川の川上と川下が有明海で交流」。7月24・25日には大杉自然塾(日向神ダムの謎を知らう・水泳・箱舟・カヌー・川の生物調査・魚釣り・キャンプ)。98年5月24日には有明海の交流潮干狩り。99年5月30日には6回目の有明海の交流潮干狩り。2000年5月3日には、7回目の有明海学習と交流潮干狩り。7月22・23・24日には、矢部村で「子ども海彦・山彦ものがたり」。この交流事業は会発足後間もない92年3月29日「矢部川源流探訪と矢部村の元気づくり学習会」以来15回と回を重ねています。



### 広松さんの死去と第二期「水の会」発足

昨年5月、「水の会」の支柱であった広松伝会長が死去され、一時は活動停止状態となった「水の会」ですが、その後有志の助力で第二期「水の会」が立花民雄さん(「御花」)を会長、成清泰蔵さんを事務局長として再スタートしました。昨年後半から、「広松さんを偲ぶ会」や「観月会」「矢部村との交流」、学習会等を重ね、少しずつではありますが活動を再生しつつあります。又、故広松さんの遺志を継ぎ、筑後川流域や九州各地、全国の人たちと連携を図りつつあります。皆様の参加とご協力をお願いいたします。

2003年2月 「水の会」代表幹事/山口徳雄